



Puzzle文集 10

目次

| | |
|---------------------------------------|-----------|
| 蛇の目でお迎え | 1 |
| 美しいからだ | 3 |
| 落としたもの | 6 |
| 消しゴム | 8 |
| どこかでボンと弾けた | 10 |
| ぬれせんべい (改) | 10 |
| ちぎりえ | 11 |
| ボクノフネ | 13 |
| リノベーション | 17 |
| ハンマーとイエローサブマリン | 20 |
| ハンマーとダーザイン | 21 |
| 狂乱のヴォルティーチェ | 22 |
| クニモサレズ | 27 |
| 可愛いを見守る | 30 |
| 正義の煮方 | 34 |
| No-No Boy No-No Girl | 35 |
| 靴は履き物 | 36 |
| 憲法記念日 | 38 |
| ボートを漕ぐ | 40 |
| 面倒くせえな | 41 |
| 奥付 | |
| 奥付 | 44 |

蛇の目でお迎え

雨なんか降らないじゃないか。晴れの日に傘を持ち歩きたくないんだよ。

あたしに文句言わないでよ。天気予報士じゃないんだから。文句言うなら自分でチェックしてよね。

最近では後半部分が省略されている。

「雨なんか降らないじゃないか」

「あたしに文句言わない」

小言を言う相手がおまえ以外にいないのだ。うまいこと聞き流してくれ。おまえは玄関で靴を脱ぐ俺を出迎えもせずに雑誌をめくっている。随分あからさまに聞き流してくれるじゃないか。怠慢な態度ではなく成熟したスタイルだと思いたい。「ただいま」と「おかえり」のキャッチボールよりも一言余計な文句が言えるこんな日が嫌いではない。

「今日雨降る？」

「降らないみたいよ」

靴を履きながら少しがっかりしている俺がいる。すると、こんな日もある。

「雨降ったじゃないか」

駅前から歩いて七分、小走りで五分。駅前にコンビニはあるが、五分のためにビニール傘を買う気もしない。

「あたしに文句言わない」

そう言いながらタオルを握ったおまえが駆けてくる。俺は案山子になってゆっくり回る。水滴を拭う俺とおまえのコンビプレーも上達した。一周回ればタオルを受け取り貧相な頭をかきむしる。風呂なら聞かずとも沸いている。晴れであろうが雨で降ろうが仕事から帰ればはじめに風呂と決めているから。まず疲れた身体を湯で癒したいと俺が言い出したことか、汚れた身体をまず洗いなさいとおまえが言い出したことか、どちらが決めたことなのかは忘れた。

湯に浸かり指先で肩を押しながら首を回す。次はビジネスリュックにしようか。若者ぶっているようでもあり、身体への負担を第一に考えざるを得ない爺さんのようでもあり、未だ肩掛けバッグにこだわっている。

子供のいない静かな食卓。上の階から時折にぎやかな足音が響く。顔の知れた子らだから悪い気はしない。「にぎやかだね」とは言わない。「ごめんね」なんて返されても飯が不味くなるだけだ。

「もしもーし」

おまえは食卓塩を持ち上げてそれを耳にあてる。何でもかんでも携帯電話と間違えることが流行ってるようだ。

「なに？」

「明日、ちょっとママの様子を見てきてもいいかな？」

「どうした？」

「なんか、この前の入院から弱っちゃってね。特に何も無いんだけどたまに顔出したほうがいいかなって」

「そうか。よろしく言っておいてくれ」なんて、適当なことを返す。

休日は別々に過ごすことが多くなった。

「今日雨降る？」

「降らないみたいよ」

おまえは実家へ、俺は隣駅のデパートへカバンを見に行く。

「夕飯前には帰ってくるから」

「いいのか？」

「お菓子でも食べながら、二、三時間も喋ってればいいの」

俺は一駅で電車を降り、おまえを見送った。二、三時間もよく喋っていらえるものだ。

カバンはすぐにどうでも良くなり、本屋へ足を運んだ。手に取った文庫本を数ページ立ち読みしていれば、ふと書齋の机に積まれていた気がして棚へ戻す。続きをじっくりと読みたい。結局、何も買わずにマンションへ戻ることにした。駅を降りて空を見上げる。天気予報はどうもあてにならない。

半分は漫画本で占められている書齋に隠り、机の上から例の文庫を見つける。リクライニングチェアに腰掛け小説の中へ。しばし現実から抜け出す。女に振られた男があの手この手で必死に復縁を迫る頃、携帯電話が震えた。「そろそろ帰ります」の後ろに笑顔のアイコン。心底ホッとした。

時計を見上げてから窓を目にする。ざらざらの型板ガラスで外の様子は分からないが、時間の割にやけに暗い。立ち上がって、玄関の戸を押し開ければ案の定。

「雨か。あいつ傘持ってなかったよな」

俺は小説世界を引きずったまま、傘を持って駅に向かおうなどと考える。あいつはひどく驚くだろう。その顔を拝んでやるのもまた一興。そして、二本の傘を持って家を出た。童謡『あめふり』なんかを鼻歌に駅へ向かった。

しばらく待っていれば地味な格好をした女が現れた。思わず口元が緩む。しかし、自動改札から出てきたおまえは小さな折り畳み傘をバッグから取り出した。俺は阿呆な顔して口を開けた。「あ」と声を漏らした瞬間、おまえは俺に気づく。そして、小さな笑みを浮かべながらそれを耳にあてた。

美しいからだ

何故腹の肉が落ちないのか、こちら辺で本気になって考えてみたい。直立二足歩行している時や仰向けで寝ている時には差ほど気にならない。しかし、布団の中で横を向いた時、椅子に腰掛けている時など、どうしたって垂れ下がるその存在が気になって仕方ない。物心ついた時から腹の周りには一回り余計な肉が巻きついている。

これは俺に与えられた試練の肉ベルトなのだ。さながら孫悟空の緊箍児。頭に巻きついているあれね。緊箍児ならば三蔵法師が呪文を唱えた時だけ苦しめば済むが、この肉緊箍児は始終俺を辱めている。一向に外れる気配がない。俺は生涯を通じて肉に苦しめられながら生きていくことになるのだろうか。

からだを覆っていた泡を洗い流し、深いため息をつきながら風呂椅子に腰掛けている。首を垂らしたアングルから広がる絶望的な光景。肉緊箍児、陰毛、陰茎、臍、臍毛。人類の雄どもに与えられた中途半端なこの毛が身体の醜さを助長する。どうせならば獣のように全身を毛で覆ってくれればよかった。

風呂の戸がノックされた。

「あい？」

「大丈夫？ もう夕飯の用意できてるんだけど。冷めちゃうよ」

「ああ、大丈夫。ちょっと考えごととしてただけ」

俺は最後に手桶で湯を肩から浴びると、風呂椅子から立ち上がる。そして、湯船に漂う陰毛をすくって排水溝に流したら、手桶を湯船に放って風呂場を後にした。

脱衣場を兼ねる洗面所には不必要に大きな鏡が張り付いており、否が応でも醜いからだを映しながらバスタオルで湯を拭う羽目になる。意を決して鏡と向き合い、肩幅程度に脚を開く。少しだけ腹に力を入れれば、中途半端に毛を散らしたこのからだもそれほど悪くない。しかし、餓鬼の頃から巻かれている肉緊箍児のせいで、消えることのない皺が気になる。何も機能しない乳首と臍の間につうと引かれた一本の折り目。三段腹というのは、ある程度痩せているヒトのものよね。俺は二段派。捻り運動がいいと聞いたような気がするから、背中を拭きながらぐるり腰を回す。そして、十分に全身の水気を拭いにとって体重計に乗るときには、決まって腹を凹ませた。

もし、有名人にでもなってプライベートジムのCM出演依頼が来たら、俺は絶対に断らないだろう。昔から忍耐力だけはあるのだ。与えられたことを完遂する能力には長けていると自負する。しかし、この労働に追われる日々に、自ら高い金を払ってまでどうしてやっていられよう。

「どうしたあ？」

カーテン越しに再び君の声がする。君はどこまでも優しい。さっさと旦那に夕飯を食

わせて食器を洗いたいのが本音だろうが、そうと言わないだけ優しさがあるではないか。

「あいあいもう出ます」

テーブルには、キャベツが敷かれた豚肉の生姜焼き、ワカメと豆腐の味噌汁、そして、湯気をたてる白米。口の中には唾液が湧き出し、椅子を引いて腰掛ければ、再び肉緊箍児が飛び出す。そいつを掴んで溜息一つ、途端に君が緊箍呪を唱える三蔵に見えてきた。二七歳の若さでこの世を去った美人女優のせいで女三蔵が定着してしまったけれど、本来の玄装三蔵は男の僧だったはずよ。そして、君が差し出すものはシャクシャク音を鳴らす遊環のついた錫杖ではなく、糖質抑えめの発泡酒。五〇パーセントオフならば二本呑んでも平気よね。俺は懲りずにプルタブを鳴らす。飯の前に風呂に入るのは、何よりこいつを美味しくいただくためでしょう。

「いただきます」

ひとまず発泡酒を一口。

「お疲れさま」

いつもの通り絶妙なタイミングで君は言う。いつもの通り絶妙なタイミングで君は言うのだ。いつもの通り絶妙なタイミングで君は言うのだから日々は素晴らしい。

続いて、俺は豚肉を摘まみ上げて口へと運んだ。十分に咀嚼して喉の奥へと流し込んだ後、再び発泡酒で喉を潤す。嗚呼、至福。続いて、白米を十分に噛み締めて甘味を堪能したなら、塩辛い味噌汁で流し込む。気を緩めると、背中が丸まって肉緊箍児が飛び出してくる。俺はその都度、背筋を伸ばして、椅子に深く掛け直した。

「私、胃下垂なのお」

なんて自慢するようにボヤきながら、甘い肉を好きなだけ食らって、酒を呷ってみたいものだ。

「なんか言った？」

台所で水仕事をする君が水道を止めた。途端、夜のアパートが静まり返る。

「いや、何でもない」

俺はもう一缶のプルタブを鳴らすと、そいつを片手に立ち上がり、テレビリモコンを手にとった。電源を入れれば、だらしないからだで半裸になった芸人が、情けない声で吼えていた。笑いをとっているのか、笑われているのか、俺は腹を引っ込めて苦笑い。すると、君は台所から屈託のない笑い声を響かせた。

布団の中で戯れる時は決まって電気を消してと言う。

「なんで？」

「恥ずかしい」

本当は、あんたの醜いからだに目も当てられないからと言いたいのではないか。大体、女のほうが悪趣味だと思うのだ。なんでこんな中途半端に体毛を生やして、汗腺が開きっぱなしの醜いからだに抱かれることを拒まないのか。俺だったら一秒だって耐えられない。そして、柔らかい君に頬を埋めながら、嗚呼、男で良かったと深く思うのだ。

「いきそう」

「いいよ」

君の包容力は半端ない。

翌朝、ニュース番組を眺めながら鰯の干物をほじる。連日、スポーツ選手の活躍を目にしながら背筋を伸ばして腹を凹ませる。終了のホイッスルが鳴り響き、ユニフォームを脱ぎ捨ててフィールドに倒れ込む男たち。勝ってはしゃぎ回る姿より、負けて崩れ落ちた姿に男を思う。嗚呼、男とは本来あのようにあるべきなのであろう。腹に関してのことだ。

朝の通勤列車は混雑率二五〇パーセント。身動き一つとれず、中吊り広告を読むくらいしかやることがない。それでも、サラリーマンにとってこの中吊り広告というものは世間を広く浅く見渡す上で有用な情報源の一つである。特に雑誌の広告となれば隅々まで読んでしまう。週刊誌の芸能情報なんて、見出しさえ眺めておけば話題に領くくらいのことはできるだろう。

その日、中吊り広告に首を上げれば、鍛え上げられた男の写真と一緒に、腹割だの、腹凹だのとどこかで見た覚えのある言葉が並んでいた。おそらく、それだってかつて電車の中吊りで見た覚えだろう。雑誌名とともに、その新語と腹の写真がすっかり結びついている。

腹八分目、仕事は六分目。外回りを早めに切り上げて、帰りには本屋へ立ち寄った。思い立ったらまずは本屋だ。ネットに溢れる情報はどれも信用ならない。何が本当で何が嘘なのか、俺にはうまく拾い上げることができない。そして、金を払って手に入れた情報は、それだけ価値あるものに思え、金額に比例した効果が得られるような気がするだろう。

平日のまだ陽が沈む前の本屋は、立ち読みする餓鬼やら主婦やらが並び、スーツ姿のサラリーマンが踏み込むには少々気まずい雰囲気が出されている。俺は首を窄めてひとまず雑誌のコーナーへ向かった。何を思い立ったかって、腹の肉を本気でどうにかしてやろうと思った訳だ。となれば、真っ先に思い浮かぶのは電車の中吊りで見たあの雑誌だ。

しかし、これも肉緊箍児の呪いだろうか、男性向け健康雑誌の腹割・腹凹特集号にはなかなか手を伸ばせない。あんな現実離れした表紙を見せられては、どうしたってある程度できあがったからだを持ち合わせていて、更にもうちょっとやってやろうかなという上級者でないとレジには運べない。もしくは、君と二人でヘラヘラ笑いながら手でもつないで阿呆のようにレジに向かうかだ。これが胃下垂を手に入れろ特集号で、景気の悪そうな男が済まなそうに腹を晒している表紙だったなら、俺は一人でも気後れせずにレジへ運ぶ事ができただろう。

馬鹿なことを考えながら実用書コーナーへと移る。そして、平積みの本を眺めていくと、あるスポーツ選手のトレーニング方法を紹介する四六判の並製本が目にとまった。皆が話題にしそうな世界大会くらいしかテレビ観戦をしない俺であっても、その選手はなんとなくお茶の間アイドル的な存在として認識されている。その本を手に取り、ペラペラとページを捲れば、「腹を凹ませたい」という項目があるではないか。このトレーニングとストレッチを続ければ、いずれアスリートの腹が手に入るというわけか。俺は決意を堅め、腹に力を込めながらレジへ向かった。

意気揚々と君の待つアパートへ帰り、温かい夕食を済ませると、俺はほろ酔い気分で買ったばかりの本を捲る。そして、腹を凹ませるために必要なページを広げると、次々

カメラでタブレット端末へと撮り込んでいった。

「これさえこなせば」

俺は、鼻息を荒らげながら、撮り込んだ写真を指で送っていく。既に大きな一仕事を終えた気になっている自分に「これから、これから」と言い聞かせながら、満悦顔でタブレットを眺めていると、君が大きな顔を寄せてきた。

「もしかして、痩せようなんて考えてる？」

「ちょっとね」

少し間を置き、君は不安げな声をあげた。

「それって私もかな？」

タブレットを下ろして君と向き合えば、何故か申し分けなさそうに、その大きなからだをほんの少しだけ萎縮させている。首を下げたまま上目遣いで俺をのぞき込むようにすれば、その大きな肉饅頭のような顔の下に、くっきりと二重顎が浮かびあがった。

「まさか」

そんな愛おしい顔をされたら、その大きなからだを抱きしめざるを得ない。

「もしかして、私のため？」

君はいつも気にしているけれど、俺は本当に大きな君が好きなのだ。だから、君のからだが大きくなって僕の二倍になったら約束どおり町の教会で結婚しようよなんて、少しおどけながらプロポーズをした。

「二人のためだよ」

君は十分頑張った。どうしたって俺がもっと頑張らなければいけない。君の大きく美しいからだから身を離すと、俺は自分の腹の肉を強く摘んで痛みに耐えた。ようやく肉緊箍呪の呪いを解く秘技書を手に入れたのだ。それを伝えようとして口を嚙む。この場に相応しい言葉ではないように思えたから。だから、俺は黙って君の手を取る。そして、解呪の先にのびる二人のバージンロードに目を細めた。

落としたもの

「あんた、なんでそんなに忘れ物が多いの？」

うるせえばあ。俺は忘れ物が多いのではない。落とし物が多いのだ。これはもう病気ではないかと思うくらいに物を落とす。

「あんた、今日も忘れたの？」

うるせえばあ。なんで母は同じものを持ち帰らずにいる息子のそれを忘れ物だと言い張るのだろうか。

「明日は忘れないで頂戴よ」

うるせえばばあ。そう言う俺も、これが忘れ物なのか、落とし物なのか、はじめは分からなかった。これが落とし物と知ったのは、拾い上げる君が現れたから。

学校の帰り、電車のシートに浅く腰掛け、スマホを弄りながら足を投げ出していると、ガチャベルトでスカートを裾上げした君が俺の足を跨いだ。

「はい、落とし物。この前、おべんとばこ落としたでしょう」

君はトイ・ストーリーのナプキンの結び目を摘まんで、弁当箱を差し出した。軽く赤面した。こんなことになるまで気にならなかったけれど、こんな歳になってまでトイ・ストーリーだったのかよ。俺のナプキン。

手にしたナプキンはパリッとしていて、洗濯した上にアイロンがかかっているようだ。弁当箱も洗ってあるのだろう。君の親の厚意であったとしても。

「どこに落ちてた？」

「昇降口で落としたでしょう。あの時、叫んだんだよ、私」

言われてみれば、はじめて聞く声ではない気がする。

「おべんとばこおって、叫んだ？」

「おとしものおって、叫んだよ」

次はペンケースで、その次はスマホだった。

スマホの時は焦ったけれど、その一方で戻ってくる確信があった。大ごとにはしななければ、母にうるさく言われることもなかった。

黙って二晩を過ごせば、案の定、君が現れた。

「はい、落とし物」

スマホケースには三つ目のエイリアンが貼り付いている。俺はまた赤面した。

「めっちゃ助かったよ」

君は鼻で笑って少しだけ口元を緩めた。落とし物は決まって君が電車を下りる間に手渡される。だから、一言二言しか言葉を交わすことができない。

すまほおって、叫んだ？

同じようなことを聞いても芸がない。つまらない男だと思われたくはないが、芸がない。少し言葉が行き交えばそれでよかった。俺は三つ目のエイリアンを指さす。

「こいつの名前知ってる？」

「知らない」

「リトルグリーンメン」

夜は早めに布団に潜って君を思い返す。何より見た目がよかった。女は見た目が八割。いや十割だね。蕎麦かよ。無理に笑いを堪えたら豚鼻になった。

「あんた、何やってんの？」

カーテンに仕切られた向こうで、姉はまだ机に向かっている。

「鼻がつまってる」

「風邪？」

「大丈夫」

「あんた、最近忘れ物が多いって母さん愚痴ってるよ」

「忘れ物じゃない。落とし物なんだよ」

「なにそれ？」

「いや、なんでもない。寝る」

俺は落とし物の神に感謝する。わざとじゃないんだ。本当に。あなたの落とししたのは金の斧ですか？ そういうやつかよ。銀の斧ですか？ おまえ誰だっけ。イソップ童話？でも本当に。わざとじゃないんだ。わざとやったら君は拾えない。そんな気がしている。それに、キモいだろ。

それなのに、

「あんた、わざとやってない？」

俺は差し出された生徒手帳に手を伸ばして、舌を打つ。もしもの為に用意していた言葉があった。ただの照れ隠し。俺は随分と酷いことを口走ってしまった。

「おまえ、俺につきまとってない？」

まさか蹴られるとは思わなかった。でも、目の前のキモい男がシートに浅く座っていたら、横っ面を蹴るものかもしれない。

家に帰ればまた弁当箱がなかった。

「あんた、なんでそんなに忘れ物が多いの？」

「うるせえばばあ」

ようやく声に出た。母は目を丸くした。気持ちのいいものではなかった。泣かれたら堪らん。沈黙を破る姉。部屋から飛び出してくるなり俺をひっぱたいた。蹴られたのと反対の頬。続いて、姉は目を丸めた。俺が泣いていたから。

「忘れ物じゃなくて、落とし物なんでしょ」

姉の優しさに、俺は涙を流して笑った。

課題「落とし物」

消しゴム

真っ白な紙をこすり続けて一時間が経つ。俺の解釈が間違えているのかもしれないが、物語ははじめからではなく、途中から描いたほうがいと聞いたことがある。八つの角を順番に潰していきながら、丸くなってきた消しゴムをなおもこすり続ける。どうせならば、この汚れたデスクの上をまんべんなくこすれば、掃除の代わりにもなったろう。しかし、真っ白な消しゴムが魅せられた俺は、いつまでも白紙の上で行ったり来たり。発端は、使い切ったためしがないよね。とかさ。気づくとどこかに行っちゃうよね。とかさ。ふと、そんな他愛もない会話があったことを思い出したから。実は消しゴムには俺の知

らない性質や能力があったりして。そもそも使い切れないものなんだよ。必ずどこかに行ってしまうものなんだよ。そんなことを考えるようになったら、何も予定していない休日に新品の消しゴムのパッケージを剥いでいた。既に消しゴムははじめの大きさから半分を下回っている。人間の年齢で言えば四十路といったところか。ちょうど俺くらいではないか。「不惑」という言葉が浮かんで鼻で笑う。それは成長した結果でなく、単に感覚が鈍りはじめでいるだけではないのか。嗚呼、不惑。思わず消しゴムをこする手に力がこもる。一度決めたことだから最後までやり切ろう。消しゴムの四十路は俺の四十路とは訳が違う。俺は二十歳の頃まで身体を作り上げ、不惑に至るまで無駄な肉を盛り付けてきた。それに対して消しゴムは、完成された身体で世に送り出され、ひたすらに身を削り続ける。不意に俺は手を止めた。やはり消しゴムは使い切られる前に俺たちの手元を離れるべきではないか。そして、その先には消しゴムの樂園なんてものがあるさ、風化するまでの余生を楽しむのさ。こんなおっさんに見張られながらこすり続けられるなんて、こいつも不憫な消しゴムだね。嗚呼、いつになったら私はこの濁った目を盗んで逃げ出すことができるのかしら。消しゴムの悲痛な叫びが指先から伝わってくる。でもね、おまえだけじゃない。俺だって身を削ってはたらき続けているのだよ。贅沢なんて求めなくとも日々は過酷だ。それは生物の宿命のようにも思える。肉を食らって肉を盛る。どんな生物だって肉を獲るために日々必死だ。無数の命を食らっては、生涯を通じて一つ二つの命を生み出し、それを育てては息絶える。それに比べて消しゴムはどうだ。他人の手によって次々生み出され、文句も言わずに身を粉にする。なんだよ。こいつらは馬鹿に潔いじゃないか。文句の一つでもたれてみなよ。痛い辛い言ってみなよ。嫌みの一つも言ってみなよ。こんな晴れた休日になに馬鹿なことしているんだと鼻で笑ってみなよ。なんだよ。こっちがまるで駄目みたいじゃないか。こいつがその気なら、俺だって黙ってこいつを粉にし切るまで。白紙の上を行ったり来たり。時折、向きを変えて、行ったり来たり。また向きを変えて、行ったり来たり。次第に消しゴムは球体に近づく。身の上に心配ある事情だけ？ 惨状だけ？ あれ？ それって円の面積だけ？ 円周だけ？ 俺は基本的に理系だから数字は嫌いでないのだが、公式というのがどうしても頭に入らない。ジョウテイタスカテイカケルタカサワル2。そこまではよかった。イメージができるじゃないか。しかし、 π とか出てこられるともう。イメージできないものはなかなか頭に入らないんだよ。限りなく球体に近づいた消しゴムに手のひらをあてて紙の上で転がす。俺の行為はいつしかこすり切るという目的から球体にするという目的にすり替わっている。限りなく球体に近いそれを親指と人差し指で摘んで目の前に持ち上げる。それは、一つの衛星のようで、目の前を行ったり来たりさせてみる。俺の頭の周りをグルグルと回り続けてくれればいいと思いはじめる。なかなかないだろう。頭の周りを衛星が回り続ける男。でも、俺がそれを望んだとして、消しゴムはどうだ。こいつは真っ白な消しかすになることを望むか。俺の手を離れて消しゴムの樂園へ向かうことを望むか。俺はしばらく考えた挙句、窓を開けた。続いて、ボールのようにも見えるこいつを思い切り遠くに投げ捨てた。そして、泣いた。少しだけ。

課題「消しゴム」

どこかでボーンと弾けた

蒸し暑い夏の夜、二三度に設定された冷房の直下でブランケットにくるまる。嗚呼贅沢。五・二インチの画面に目をあてながらぼんやりと情報を送ってれば、どこかでボーンと弾けた。

「今日どこかで花火か？」親父の問いかけに、「知らん」と答えながら、將軍様が打ち上げた大陸間弾道ミサイルを思い描いている。親父だってそう思ったに違いない。花火なんて鳴ったろうか？俺は耳をすます。ジェイアラートはスマホにもくるのかしら。突然震え出したら俺も焦るわ。横浜市熱中症予防情報。この季節、俺のスマホにくる大半のメールは yokohama@bousai-mail.jp。林文字も再選。明日の熱中症ランクは「原則運動中止」です。未曾有の異常気象の中でも俺は死ぬほど寒い。I C B Mの弾頭に花火を入れておいてはどうかしら。速射連発打ち上げのスターメイン。日本への到達が一〇分、グアムへの到達が三〇分。「たまや～」、「かぎや～」とコンピューター制御で次々に弾頭から打ち下ろされる三号、四号玉。島根県、広島県、高知県の上空を通過するアーチ状の巨大なワイドスターメインが夜空を彩る。愛媛も含めた四県に設置されたP A C 3が四尺玉で応戦。それは北の地平線から南の地平線へ延びる天の川に架けられた大橋のようでもあり、つまりは何千万羽と飛び交うカササギの群衆、年に一度だけ落ち合うことのゆるされた織姫星と牽牛星を渡す。盆も過ぎたけれど。

「おまえ何ニヤニヤ笑ってんだ？」

親父はひどく顔面を崩壊させて俺を見る。

「俺って結構ロマンチストだろう」

親父の口が阿呆と動いた。

課題「花火」

ぬれせんべい（改）

「ぬれせんべい かって のりこむ ちょうしでんてつ」

「日本全国鉄道かるた」の絵札には、銚子電気鉄道デハ七〇〇。幼い息子はぬれせんべいが電車の愛称だと勘違いしているようだ。

「電車じゃないぞ。ぬれせんべいってのは」

魔が差した。

「銚子の妖怪だ」

語感に妖怪ぬりかべに近い。しかし、俺は妖怪あかなめを思い浮かべた。水木しげる著「カラー版妖怪画談（岩波新書）」を手に取る。パラパラとめくれば、灰色の顔に真っ赤な舌がペロリと伸びた妖怪あかなめ。その姿と紹介文から妖怪ぬれせんべいを思い描く。

誰もいない夜の台所に出ては、堅焼き煎餅を舐めることでしっとりさせてしまう。煎餅をなめるだけで何をやる訳でないが、十分に気分が悪い。「ぬれせんべいがくるぞ」と言えば、誰もいい気持ちがないから、茶箆筒を掃除する。いわば教訓的な妖怪とみるべきであろう。

俺は息子のベッドタイムストーリーを考える。気持ち悪すぎてもだめだ。時折、茶箆筒から顔を出す、どこかにくめない妖怪でありたい。まずは妻へのピロトークで実践練習。彼女は話の序盤で眠りについた。子供を寝かしつける本来の目的としては申し分ないが、何処か面白くない。翌晩、俺は更に色をつけて枕元で妖怪ぬれせんべ〜。

「こんなに煎餅がしっとりしているのに、まだ茶箆筒の掃除をしないのか。その夜、妖怪ぬれせんべいは米粒大の卵を吐き出し、茶箆筒をびっしり埋め尽くす。翌朝、何も知らずに扉を開ければ、次々に孵化する妖怪ぬれせんべ〜」

話に熱がこもれば、彼女は暗闇の中で起き上がる。

「いい加減にしてよ！ 気味が悪い！ 食器棚を掃除しろって、はっきり言えばいいじゃない！」

俺は思いがけない反応に狼狽し、「ちがうちがう」と腕を振りながら後ずさる。踏みつけられた息子が悲鳴をあげる。驚いた彼女は照明のリモコンを探して畳をバンバン叩く。そして、食器棚からケケケと聞き慣れない笑い声をした。

課題「怪談」

ちぎりえ

あれほど貸してくれるなど言ったのに、風邪で休んだ週末、あいつは随分と汚い手を使ってきた。

玄関からあまり聞き慣れない親父の音がする。そして、声が止んだかと思えば、ノックもなく部屋の戸が引かれた。

「おい、ともだちが暇だろうからって本持ってきたぞ」

親父は、三〇〇頁は優に越えるだろうハードカバーをベッドの上に放り投げた。嫌み一つ無いあいつの紅顔が思い浮かび、その本はコンクリートブロックのように重くのしかかってきた。

あいつを知ったのはつい最近、吊革につかまって本の中に入り込んでいた下校時のこと。

「本、読むんだ」

途端、俺は現実には引きずり出された。きめ細かい肌に張り付いた笑顔。次に何を言い出すのか。俺は不安に顔をひきつらせながら、表紙を隠すようにゆっくり本を下ろした。

「その作家が好きなら、次はこれ読むといい」

スクールバッグから取り出された一冊は、どっちがタイトルでどっちが作者名なのか。そんなことすら判断できない代物だった。

「読み終わったら貸すよ」

先に下車するあいつに俺は苦笑いで首を振る。遠慮したと勘違いしたのだろう。あいつは微笑みながら手を振った。

活字が好きだ。音楽よりも、動画よりも、顔のない相手とのSNSよりも、紙をめくって文字を追いかける作業がなにより好きだ。この時間だけはまわりの一切を遮断して没頭することができた。

俺は腹を圧迫する本に手をあてる。作者名かもしれない題名のそれはきっと素晴らしいものなのだろう。俺はその手触りに堪えられず、次の瞬間には頁を捲っていた。

気づけば部屋は薄暗く、満足感とともに本を閉じると大きな不安が襲いかかってきた。「その作家が好きなら、次はこれ読むといい」まったくあいつの言う通りだった。俺はこの本を何と言って返すべきか。手に力が籠もる。作中の一文を引っ張り出し、顔をひきつらせながら思ってもいない言葉を並べて顔色を窺うのか。すると、あいつは俺とは異なる一文を引っ張り出して、まったく共感できない言葉を連ねる。俺は苦笑いを浮かべながら阿呆のように五度も頷く。言葉を交わすほど糞が塗られ、俺を魅了したはずの作品が目も当てられない愚作へと仕上がっていく。

「だぶんだ、だぶんだ」

俺は雄叫びをあげながら真っ二つに本を引き裂いた。親父は勢いよく部屋の戸を引いた。

「おまえ、大丈夫か？」

俺は引き裂かれたそれを咄嗟に布団の中に隠した。

「飯、食べるか？」

俺は頷く。親父の飯は炒り卵と釜揚げシラスに生野菜。茶の代わりに汁物でもあれば上々だ。俺は親父の背中について台所へ向かい、二膳分の冷や飯を電子レンジにかけた。

野球中継を眺めながら飯をつつく。親父は俺との間合いを計りながら沈黙を埋める。

「熱どうだ？」

「三七．七」 適当に呟いて咳込んでみせる。

「朝まで熱引かなかったらベッドで寝てろ。明日は仕事に行くけど平気か？」

「大丈夫」

早々に晩飯をすませてベッドへ戻る。布団に手を突っ込むが本はもとに戻っているはずもない。仮病を引き伸ばしたところで意味がない。あいつが次の本を持って、この本を回収しに来る可能性だってある。俺は真っ二つの本を手にとって、一枚破く。また、破く。

「来る、来ない」なんて。

小学生の頃、担任にちぎり絵を誉められたことがあった。「星空」なんてタイトルをつけて有り得ない色を散りばめればいい。そんなことくらい見抜いていた。

俺は掛け布団を退けて、真っ白なシーツの皺を伸ばした。そして、本をちぎる。文字の画数、文章の密度でコントラストが決まり、それを一六階調に分類した。ちぎり絵よりもギャザリングアートに近い。一晩中、モノクロのパーツを並べる作業はひどく退屈で、あいつの笑顔を思い返すことはひどく苦しい。

朝になって体温計を咥えると本当に三七．七℃を示していた。ノックもせずに部屋の戸を引く親父は、掛け布団に包まって床の上で丸くなった俺を見下ろす。

「おまえ、大丈夫か？」

「三七．七」

俺は自慢げに体温計を渡した。親父は体温計を見もせずベッドの上に目を凝らす。

「ともだちか？」

「だぶんだ、だぶんだ」

早く部屋を出ていってくれればいいと願うが、親父は部屋を出るタイミングを逸していた。そして、これが狂ったふりであることくらい見抜いていた。

ボクノフネ

前向きなニュースといえばオリンピックを除くスポーツニュースと将棋の話。天気予報は連日未曾有の異常気象。大半のニュースは傷だらけの地球と心ない阿呆が引き起こす惨劇や失笑劇。

そんな中、新しい元素が発見された。発見されたというより、合成されたというのが正しいようだ。年に数個しか合成できない原子は一〇〇〇分の一秒という速さで崩壊を繰り返す。既知の元素へと姿を変えてしまう。そんなものが一体なんの役に立つのか。

難解な言葉を並べ立てられた記者会見に素人は目を瞬かせるばかり。科学立国の悲願であった。子どもたちに夢を与える研究だ。そう言われてもいまいちピンとこない。

入れ替わり入れ替わり流れゆくニュース。視聴者ウケしないものは直ぐにメディアから消え去った。防衛大臣や特命担当大臣が連発するエラーと、学園新設に関する首相らの虚偽答弁はもう少し停滞しそうだ。なんであんなに平気で嘘ばかりついていられるのか気が知れない。その凶太さといったら凡人には到底考えられないレベル。

「やっぱり天才っているんだよ。努力すればなんでもできるってウソウソ」

「急にどうした？」

ユートは、荒削りな笑いを誘うボブという名のパンツをはいたスポンジが大騒ぎするテレビの前で、ウンウンと何度も頷いている。

「画面の向こうの出来事は、全部凡人が作り出した夢の話なんじゃないのって疑うよ」

「そのスポンジのことか？」

あいつは首を横に振ってスマホの画面を差し出した。テレビ観てないなら消せよ。

「こいつなんて俺と同じ歳して、デビュー戦から一四連勝だってよ。見た目はあんまりパツとしないのにな」

おまえだってパツとしてないよ。そう言いたいところだが、見てくれは俺が授けた遺伝子の問題。いつまでたってもあいつが凡であることも、きっと俺のせいなのだろう。財産があるわけでもなし。健康以外に取り柄もなし。嗚呼、つまらなし。

「悪かったね」

鼻を吹かして拗ねてみせる。あいつは眉を持ち上げて首を傾げる。その大人びた仕草に、俺はカウンターを繰り出した。

「夏休みの自由研究は計画たてたのか？」

ユートに代わってスポンジが悲痛の声をあげた。テレビ消せよ。続いてあいつは肩を落とす。ドリルなんかは嫌いでない。読者感想文だって苦手でない。しかし、自由研究するのはなんだよ。そいつが残っていることに毎度悩まされる。

「なんだよ、その無責任な課題は」

ユートは続けて「自由だって言うならやらないってものありじゃねえの」と、毎度お決まりのぼやきとともにため息をついた。俺はふと年に数個しかできず、一〇〇〇分の一秒という速さで崩壊する新しい元素を思い出す。あれから研究は進み一〇〇分の一秒くらいには長持ちするようになったろうか。

「なあ、新しい元素が発見されたニュース覚えてるか？」

ユートは警戒感を示す。自由研究に面倒な提案でもされると思ったのだろう。俺が眉を持ち上げれば、あいつは首を振る。俺はなんだかあのニュースがとても好きなのだ。水兵リーベの一字を手に入れた。今まで地球上に存在しなかった新しい物質が生み出された。何か期待してしまうではないか。虚偽答弁を繰り返す阿呆を目覚めさせる起爆剤にならないかしら。傷だらけの世の中を慰める治療薬にならないかしら。ニンゲン社会にはまだまだ希望があるのではないかしら。

「おい親父」

俺はふと目を覚ます。

「どうした？ ぼうっとしてたぞ」

俺は目を瞬かせる。

「今、なんて言った？」

「親父」

あいつだって突然飛び越える。

「って呼んでいいかな？」

もちろん。

「自由研究終わったらな」

あいつは複雑な笑みを浮かべて曖昧に頷いた。

「BREAK ON THROUGH TO THE OTHER SIDE BREAK ON THROUGH TO THE OTHER SIDE」

この場にふさわしいものだとは確信は持てないが、俺はそんな歌を口ずさみながらパソコンに向かう。そして、「新しい元素」と検索した。昨年それに名前が付いたということ以外、その後の研究に関する公開情報は確認できなかった。研究論文に纏まるまで中途半端な情報は公開できないのだろう。気になりはじめると妄想は膨らむ。随分長持ちするようになったろうか。年に五個ほど作れるようになったろうか。マウスに振りかけると毛が伸びたりして。火星には大量に存在する物質だったとか。原子力に代わる高効率な発電技術につながるとか。もし、ユートが新元素を発見したら「ユートニウム」だな。「ニウム」ってなんだ。検索しようと打ち込めば「荷有無」と変換された。

「父さん」

不意に呼ばれて「荷有無」を削除した。

「父さん？」

「だって、自由研究終わってからなんだろう」

俺は片一方の頬を膨らませて、二、三頷く。そうだったな。父さんに戻ってしまうのも少し寂しい気がする。

「決まったのか？」

「決まった。黄砂について調べるよ」

ユートはスマホを捲りながら思いがけない回答を示した。社会系だったか。

「中国の陰謀だとかゴビ砂漠はゴミ溜め砂漠だとか言いながら洗車してるじゃない」

俺の顔は熱くなる。記憶にございませぬ。あいつは親父のためだと胸を張る。そして、俺の頭上に手を伸ばすとプリンターから一枚の用紙を引っ張り出して、ペンを片手にスマホを捲りはじめた。

「スマホで済ます気か？」

「駄目なん？」

「図書館くらい行ってこいよ」

「なんで？」

うまい答えが見つからないまま「信憑性」と呟き、「ニウム」を検索する。「ium」はラテン語における中性名詞の語尾なのだから。国際純正・応用化学連合の命名法により、金属元素の語尾にも「ium」をつけようということになっているのだそうだ。ネット情報とはいえ、ラテン語である、国際O (E) 連合の命名法である。

「なるほど」と言わざるを得ない。

「黄砂の多くは中国内陸部タクラマカン砂漠から舞い上がり偏西風に乗って三月から五月くらいに日本に飛んでくる。黄砂と言ってもその粒子は一〇〇〇分の二から五ミリメートルくらいで、砂と言うより土の粒子くらいの大きさでっす」

ユートは書き上げたものを満足気に読み上げる。

「なんだ。それで終わりか？」

「ウチのお父さんはゴビ砂漠をゴミ溜め砂漠と呼んでいます、どちらかと言うとタクラマカン砂漠から飛んでくることが多いでっす」

「要らんことは書かんでいいでっす」

「じゃ、あと何書けばいい？」

「アジアの地図でも書いて砂漠の場所でも示しておけば？ 偏西風ってなんだか分かるか？」

「分かんない」

俺だってわからない。調べてみるという前に、あいつの親指は素早くフリックしはじめた。

そんなあいつがまさか新元素を合成することになるとは。あの頃の俺には夢にも思わなかった。名前はもちろんユートニウム。元素番号一二一番。髭面の中にも瞳のまわりにあの頃の面影を残す記者会見で、夏休みに親父と自由研究について話をしたことがきっかけだったと感謝の言葉を付け加えた。

そうだったろうか。

ユートは高等学校を卒業すると、俺が散々に文句を言い続けた黄砂に関する研究を続けるべく、それを専門にする数少ない大学の環境学研究科で大気環境学を学んでいたはずだ。一体いつから実験物理学へと転身したのか。黄砂を研究していた頃には単身タクラマカン砂漠にも足を運び、現地の研究者とも交流を重ねた。中国国内では黄砂という言葉は一般的でなく砂塵天気と呼ばれる。その中でも規模の激しいものは砂塵暴天気と呼ばれ、黄砂とともに吹き荒れる強い風により死者も出るという。車を汚されただけで文句を垂れているこっちの状況とは比較にならない。ユートは、わがままな親父の小言につき合わされていたことに気づき、研究分野を変えたのだろう。それでも彼の地に魅せられたのか、新元素の合成は中国内陸部に設置されたワンリーライナックと呼ばれる巨大な線形加速器によって成された。

日本人科学者によるその研究成果は、久しぶりに前向きなニュースとして取り扱われ、ほんの少しだけ視聴者を明るい気持ちにさせた。実は、ユートニウムに合成に関する話は、五年も前からあいつに聞かされていた。聞かされたと言ってもメールでの連絡だ。真っ先に俺に伝えたかったと。でも、論文化されて記者会見が行われるまでは黙っていて欲しいと。なんだか狐につままれたような気持ちになったが、ようやく記者会見でテレビ画面に映し出された時には、思わず記者たちと一緒に小さな拍手を送ったものだ。それでも胸を弾ませて喜ぶことはできなかった。単に新元素合成に対する意義が理解できなかったからだろうか。

二人で自由研究の相談をしたあの夏から三〇年が過ぎたことになる。一時期、この国は着実に戦時体制を整えていると国民は危惧していたが、この島国を挟む国どうしは相

変わらずのにらめっこを続け、国内政治はエラー連発で停滞している。かつては「記録に無い」「記憶に無い」「怪文書みたいなものじゃないですか」が流行であったが、近年では「素人ですから」「これからきっちり向き合っていきたい」「しっかりお役所の原稿を読ませていただく」が主流になった。どこまでも軽くなろうとする政界で開き直って胸を張る。それでも俺たちはまだ彼らを追い出すことができない。

問題は彼らに限ったことではないのだ。特にここ数年、全てにおいてやる気がでない。春先になると、なんだかとてもいい気分がして、目尻が垂れる。かといって口角を持ち上げることも億劫だ。誰もが夢遊病者のように街を徘徊するようになった。

「母さん、今年も気持ちのいい春が来たね」

「私は、あなたのお母さんではありません」

そいつは困った。

俺は車のボンネットを覆う黄砂を指で拭い、ぺろり舌先で舐めてみる。黄砂の鎮静作用には数年前から気づいている。もちろん、それは黄砂粒子そのものの作用ではない。二から五マイクロメートルの黄砂粒子に吸着した一オングストロームの粒子たち。黄砂が特に多く日本にやってくる春先、俺はユートの暮らす遥か向こうの大陸に目を細める。同じ頃、ワンリーライナックの稼働は最盛期を迎える。

リノベーション

これと言って取り柄はない。あまり世間を知らないが、一般的に世間知らずと罵られる程ではなく、一般道を転がってきた。

生活保護費、一六〇億円削減

スマホに流れるニュースを目にしても、正直、あまり怒りを覚えることはない。それでもドイツ車の停めてある戸建てを見つけてボヤきはする。

「何したらこんな風になれるんだよ」

三五年ローンで購入した中古マンションに帰れば、料理の上手い女房と娘が待っている。我ながら上手くまとめ上げたものだ。鼻で笑ってエレベーターを降りれば、カレーの臭いが漂ってきた。途端に腹が鳴り、この臭いの源泉が我が家であればいいと願う。

「おかえりなさい」

娘はまだまだ可愛いもので、玄関の前で俺を迎え入れる。両手を広げたポーズは抱っこの催促だったか、仕事鞆を預けると頬を膨らませたようにも見えた。重たい鞆を抱えてヨロヨロと進む娘。その背中を手のひらで支えながら、キッチンに首を伸ばせば、女房が湯気の立つ寸胴鍋をかき回していた。人生はまずまずだ。

出る杭は打たれる。

限りなく球体に近い毬の中に収まって、俺はハムスターのようにあっちへコロコロ、こっちへコロコロ。打つべき杭がなければ打たれようもない。仕事は七割でこなす。率先して変革をもたらそうなどとは考えず、そんなことはやりたい奴に任せればいい。変化というやつが面倒なんだよ。ひどく面倒くさいから、ひょいとかわして、あっちへコロコロ、こっちへコロコロ。声の大きいやつは、俺のことをとても物分りの良い男だと評価する。声の小さいやつが何を言ったって、俺の耳には届かない。

そんな俺でも、この家を選ぶことに関しては随分と時間をかけた。大きな買い物だ。さすがに不動産屋の言いなりとはいかない。一度購入した家を売り買いするなど考えていない。となれば生涯で最大の買い物だろう。慎重にもなる。

その頃はまだ家族がいなかった。不動産屋に何を問われても、生活に対するビジョンがない。俺の生活はどこへ向いている。仕事に打ち込む質ではなく、週末くらいは多少快適に過ごしたい。俺の人生はどこへ向いている。死ぬまでに名言を残したいなどとは思わない。動物である限り、子孫くらい残したほうがいいかもしれないが、誇れる遺伝子など持ち合わせていない。ビジョンがなければいけないか。夢の無い人生は許されないか。とにかく安泰に暮らしてきたいのだ。週末には安らかな気持ちで安酒を舐めたいのだ。

「ですよねぇ。分かります。誰だってそういうものです」

チャライ不動産屋は適当に頷く。早く決めろと言わんばかりに何度も頷く。そして、延々車を回した挙げ句、リノベーションされたという中古マンションへたどり着いた。

「ところでリノベーションとはなんだ？」

「あ、単に痛んだところを修繕することがリフォーム。それに対して、新築の時以上に、さらに生活環境を向上させて価値を高める工事のことをリノベーションって言うんですよ」

男は「新築の時以上に」と念押ししながら、車を下りる。日本人による造語だろうか。とスマホを叩いてみれば、英単語として存在していた。修理、修繕のほかに革新、刷新という意味があるそうだ。思わず鼻が鳴った。

あの時もそうだった。エレベーターを降りたらカレーの臭いが漂ってきた。思わず腹が鳴り、その音が聞こえたのだろうか、男は俺を子馬鹿にしたような笑みを浮かべながら鍵を開ける。すると、カレー臭はまさにその家から漂ってくるではないか。

「リノベーションですよ？」

「はい、リノベーションです」

「誰か住んでるの？」

「まさか」

生活感を演出するために、カレーの臭いでも発生させているのか。眉をひそめながら、男に差し出されたスリッパに足を突っ込んだ。

リノベーションというだけあって、外観の割に内装は新築のように輝いていた。玄関から延びる五メートルほどの廊下の両脇には一つずつ扉があり、廊下の突き当たりには一三畳程度のリビングダイニングキッチンが広がる。

「こちらどうぞ」

男は突き当たりの扉を開いて、俺をまずLDKへと招いた。リビングスペースにはソファーやソファーテーブル等が見える。

「なに？ 家具があるの？」

「部屋のイメージがつきやすいように、少々家具が置かれています。使っていただけるならそのまま差し上げます。撤去もできますよ」

カレーの臭気は扉の向こうから流れ込んでくる。

「さ、どうぞ」

俺は臭いにつられるようにLDKへと踏み込んだ。そして、すぐに足が止まる。カウンターキッチンへと目をやれば、湯気の立つ寸胴鍋をかき回す女が立っていたのだ。

「こんにちは」

女は良くできた笑顔を俺に向けて小さく頭を垂れた。

「こんにちは」

オウム返しの後、男に目を向けた。

「部屋のイメージがつきやすいように、少々家族が置かれています。一緒に暮らしていただけるならそのまま差し上げます。撤去もできますよ」

すると、背後から小さな子供が駆け寄ってきた。

「おかえりなさい」

何を催促しているのか、小さな娘は瞳を輝かせながら両手を広げた。

俺は一般道をひた走り、三流大学を卒業し、二流企業へなんとか潜り込む。その五年後には長期入院に備え生命保険に入り、一〇年を節目に家の購入を検討しはじめた。

そして、足りないものと言えば、自分の家族を持つことだった。

「リノベーションか」

俺は小娘を見下ろしながら呟いた。そして、ろくに内見もせず男に告げた。

「ここにしようかな」

男の顔は輝いた。案件が成立した喜びというより、面倒な客から解放された喜びではなかろうか。ふらふらと部屋の中を歩いて回れば、後ろから小さな娘がついてくる。女は鍋をかき回しながら、時折、微笑みを送る。

俺はソファーに手をかけて呟く。

「気に入っているソファーがあるから、これは要らないや」

「あ、そうですか」

すると、男は何か言い出しにくそうにしてから、一步俺に近寄る。

「私が貰ってもいいですか？」

「別に構わないけど。ソファーテーブルは貰っておこうかな」

「分かりました。ありがとうございますっ」

その絵顔をよく見れば、思っていたよりも若そうだ。欲しかったものが手に入ると分かれば、途端に早口になる。

「では、早速店舗に戻って手続きを進めましょうか。この物件はWEBでも公開されていますんで。先に契約される方がいるとマズいんで。速いモン勝ちみたいなものですよ」

男はそそくさと廊下に出ると、そこで振り返る。

「あ、奥さんとお子さんどうします？」

俺はいつまでもついてくる小娘の頭に手を添える。

「これは、もらっておこうかな」

男は小さな笑みを浮かべ、頷いた。

「では、急いで戻りましょう」

店舗に戻ると、ベテランのスタッフが加わり、購入の手続きやローン審査の話が進んだ。団体信用保険の話になれば、女の顔を思い返していた。

俺はカレーをよそって、ダイニングテーブルにつく。女房はカウンターキッチンの向こうから、時折、笑顔を見せる。

「こんにちは」

夜だといっても言うことは変わらない。娘は俺の横に立ち、いつまでもこちらを見上げています。

「おかえりなさい」

今時、こんなものでリノベーションと言えるのか。入居当初、男に文句をつけたこともあったが、この二体の人形は生活をイメージするために用意されただけのものだという。

俺はカレーを口に運びながら、明日の夕飯は何にしようかと考えている。豚汁か、シチューか。寸胴鍋に材料を入れて時間をセットすれば、それなりのものは食える。会社勤めの身にはありがたいが、たまには揚げ物なんかも食いたいと思うのだ。

ハンマーとイエローサブマリン

これは釘を打つ道具ですか。

いいえ、これはネズミを潰す道具です。多くの場合、うまくヒットすれば身動きがとれなくなり、あとは頭蓋骨を砕くだけでおしまいです。ところでこれと言うのは金属片に木材の突き刺さったこれのことで間違いないですね。

いいえ、こちらの黄色いアーモンド状の形をしたモノのことです。

失礼しました。こちらはイエローサブマリンです。みんなで楽しい旅をする潜水艦です。バンド演奏も加わって何不自由なく楽しく暮らせる潜水艦です。

それはあまり魅力的ではないですね。

そうですか。なぜでしょう。

私は今三本の釘が打ちたいのです。それならば金属片に木材の突き刺さったこれのほ

うが向いているかと思えますよ。

でも、これはネズミを潰す道具ですよ。

イエローサブマリンよりはるかに釘が打ちやすいかと思えます。

ほかに何か釘を打つのに適当な道具はありませんか。

うちにはネズミを潰す道具とイエローサブマリンしかありません。

それではほかのお店にあたるとしましょうか。

おそらくどこのお店に行っても釘を打つための道具なんてありませんよ。

大抵のニンゲンはネズミを潰す道具で釘を打つものです。

しかし、ネズミを潰す道具で釘を打つなんてあまり気持ちのいいものではないですね。

ところで、おたくは今までどのようにして釘を打っていたのですか。

私の右手は釘を打つのにとても良い形状をしていたのですが、先日事故を起こしまして。ほらこのように手首からポッキリ。

これはこれは大変なことです。

ネズミを潰す道具というよりはイエローサブマリンに似た形状をしていました。

はてさて、そちらの左手は実にネズミを潰す道具と似た形状をしているではありませんか。

私はネズミなど潰しません。

いえいえ、左手で釘を打ってみてはいかがでしょう。

なるほど、確かにそうかも知れません。実は長いこと右手で釘を打つことに疑問を感じておりました。

あなたの右手はイエローサブマリンだったのかも知れませんよ。みんなで楽しい旅をする潜水艦です。バンド演奏も加わって何不自由なく楽しく暮らせる潜水艦です。

それはとても魅力的ですね。

あなたの右手をこちらを新調してはいかがでしょう。

確かにポッキリ折れてしまった右手よりもにぎやかそうです。

今なら取り付けるための釘三本もサービスしますよ。

ハンマーとダーザイン

俺は釘を打つ道具なのだろうか。いや、ネズミを潰す道具だろう。うまくヒットすれば身動きがとれなくなり、あとは頭蓋骨を砕いてお仕舞い。そんな金属片に木材の突き刺さった道具だ。

なに言ってんの。黄色いアーモンドみたいな形して。
俺は君とは違うのか。
あたしが見る限りあんたはイエローサブマリン。みんなで楽しい旅をする潜水艦。バンド演奏も加わって何不自由なく楽しく暮らせる潜水艦。
それはあまり魅力的ではないな。
なんでよ。
今、俺は三本の釘が打ちたいんだ。
それならば金属片に木材の突き刺さったあたしのほうが向いているんじゃない。
でも、君はネズミを潰す道具だろう。
あんたが求めれば釘打ちくらいにはなるわよ。
ほかに何か釘を打つのに適当な道具はないのか。
ここにはあたしとあんたしかいない。
それならほかの町に行くのでしょうか。
どこに行ったって釘を打つための道具なんていやしない。いつの時だってネズミを潰す道具が釘を打ってきた。
ネズミを潰す道具が釘を打つなんて、あまり気持ちのいいもんじゃないな。
あんたは今までどうやって釘を打っていたのよ。
俺の釘を打つのにとても良い形状をしていると思っていたんだ。でも、君に言わせればそうではないらしい。
なんか悪いこと言ったかしら。
そんなことはない。俺がネズミを潰す道具というよりイエローサブマリンの形をしていただけのことだ。
でも、目の前のあたしがネズミを潰す道具みたいな形をしているじゃない。
ネズミなんか潰したくない。
あんたバカ？ あたしが釘を打ってあげるって言ってんの。
それはいいかもしれない。俺は長いこと自分で釘を打つことに疑問を感じていた。
あんたはイエローサブマリン。みんなで楽しい旅をする潜水艦。バンド演奏も加わって何不自由なく楽しく暮らせる潜水艦。でも、ポンコツみたいね。
俺はネズミを潰す道具を目の前にして不安を感じているよ。ポッキリ折れてしまった俺を打ち止めてくれるのだろうか。
潰すも治すもあんた次第じゃない。

狂乱のヴォルテーターチェ

「鳴門の渦潮って、いつでも渦巻いてるんだっけ？」

前触れもなく浴びせられる問いに、何か試されているのではないかと訝る。思考回路が乱れ、俺は伯方の粗塩を思い浮かべている。埼玉生まれですから。それでも以前、関西での仕事を終えた後、徳島へ向かうことがあった。高速バスで大鳴門橋を渡るのだ。そこから渦潮を見た記憶はない。あいつの問いに対する答えを持ちあわせている訳でもない。

「徳島のあれな」

俺は父親の威厳を保つべく精一杯の答えを絞り出した。

「そう」

会話は滞り、俺はまた犬猫画像とギクシャクした人間模様のタイムラインを追う。あいつは3DSに頭を垂れた。

徳島。

仕事で足を運んだことはある。これとって思い入れはない。

「徳島って言えばなに？」

「なにそれ？」

渦潮について問いかけておきながら、あいつは俺のふった話題に興味を示す様子もない。厭きもせずにやたらボタンの多いコントローラーを操作し続けた。

俺たちは店の外に置かれたベンチで肩を寄せ、妻の戻りを待っていた。店外とは言えビルの中、暇つぶしのツールさえあれば悪い環境ではない。そう言えば、徳島ラーメンというのがあった。なにが特徴だったかは思い出せない。うどんはうどん県。

「ヴォルティス」

年に一度くらいは行く機会がある。羽田空港から阿波踊り空港へ。神戸から高速バスで大鳴門橋を渡ることは稀だ。

「ポカリスエットスタジアム」

「なに？」

「ポカリスエット…」

「その前」

「ヴォルティス。徳島ヴォルティス」

「Jリーグ？」

「そう」

あいつはYボタンでシュートを決めた。

「なんだ、ヴォルティスって？」

「J2だよ」

「いや、意味よ。ジャイアンツは巨人軍だろ」

あいつはあつという間にゴールを返され天井を仰ぐ。

「知らーん」

俺は暇を持て余し、ヴォルティスを検索。はじめにその綴りを知る。そして、アプリ【ウィズダム英和・和英辞典】で検索。vortisでは見つからず、sを削り、iを削り、vortexを得る。

一、(水などの)渦、渦巻き、旋風、つむじ風

二、(文) \ [the ~\] (戦争・論争・社会運動などの) 渦

なるほど。やはり徳島。英語ではないようだ。結局、「vortis」「意味」でググってウィキペディア。チーム名称のヴォルティス (Vortis) は、イタリア語で渦を意味するヴォルティーチェ (Vortice) をもとにした造語であると知る。

渦。

徳島と言えばまず渦なのだ。身近な渦といえば水洗便所。ごめんなさい。風呂の排水口でもよかった。北半球と南半球で回転方向が違うってね。どっち回りだか忘れたけれど。そんな豆知識を披露したところで大抵の人が知っているからあまり悦には浸れない。徳島ヴォルティスってイタリア語で渦を意味するヴォルティーチェから取ったんだぜ。割とサッカー好きでないと「へえ」とはならない豆知識。

なかなか買い物から戻らない妻。本降りになりはじめる雨。時折、雷鳴も轟き、あいつは小さい肩を揺らす。

「今日、雨の予報だったっけ？」

「こういう雨は待ったら止むだろう」

「ちょっと見てくる」

そう言って階段を駆け上ったきり、あいつはなかなか帰ってこなかった。俺は不安になりスマホを閉じる。そして、重い腰を上げてビルの外へ向かった。地下からビルの外へと続く階段を一步一步上がっていくと、なんだか空の様子が奇妙だ。肩間に皺を寄せて歩みを進める。階段を上がりきって、軒下に立ったところで絶句した。

空に海がある。渦潮を巻いて荒れる海が大雨を振らせていた。ふいに身体が浮き上がる感覚に襲われ、俺は懸命になって階段の柵を捕まえた。地上に視線を運べば、街路樹が抜き取られ、車が浮き上がる。まさか、あいつは渦潮に飲み込まれてしまったのでなかろうか。慌てて辺りを見回せば、妙なことに人々は地面をしっかりと踏みしめて進んでいる。女は軽やかに、男は勇壮に、それはいつも街で見かける人々の様子とは明らかに違った。耳を立てれば、嵐の中で鳴り物のぞめきが響いている。そして、まだ声変わりの済んでいない男児の声が嵐の街を劈いた。

「お父さんも踊らなきゃ」

声の主はさっきまでゲーム機と向きあっていたあいつ。その手には提灯が握られており、若者たちのうねりの中で小気味良い踊りを展開している。

「踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら踊らなきゃっ」

息子に阿呆などと言われる筋合いはない。とは言え、踊らない者は一人としていない。どうやら踊る以外にこの場をしのぐ方法はないようだ。俺は吹き荒れる雨風に堪え、なんとか右足で最初の一步を踏み出す。そして、柵を握った左手一本で身体を支えようとしたところ一枚の団扇が飛んできた。俺は反射的にそいつを捕まえ、右手、右足の半身を嵐の中へと投げ込んだ。

「手をあげて足をはこべば阿波踊り」

なんだって。嵐に堪えながら左手も離し、肘は肩の高さ、続いて、恐る恐る左足で二度地面を蹴る。再び右足。俺はなんとかあいつらの連へ辿り着こうと珍妙なナンバ歩きで前進する。

「もっと肘をあげて、囃子を感じて、粋に踊るんだ」

粹に踊れだと。

「早くこっちに。踊りは連としてのまとまりが必要なんだから」

手をあげて足をはこべばよかったのではないのか。ボヤけばふっと身体が持ち上がり、天空の渦潮へと引き込まれそうになる。おっさんはそんなに飲み込みがはやくないのだよ。肩を垂らして弱気になれば、ますます身体が浮き上がる。

「囃子に神経を集中っ。他の踊り子の動きをよく見て」

街全体が踊っているようだ。ガードレールが飛び出し、アスファルトが剥がれ、信号機が抜きとられ火花を散らす。ビルディングでさえ囃子のリズムで少しずつせり上がっていく。渦潮の吸引力だけではない。大地が揺れ、地面から様々なものが弾き出されているのだ。

俺は団扇をあおいで斥力を加える。なんとか大地に足をつける。そして、囃子を感じながら手踊りを繰り返した。交互に小気味よく手をあげて前進することで、浮き上がる自分を何とか押さえることができた。勝手に知り気分が高揚しはじめると、俺は踊り子に倣って唄いはじめる。

「瓢箪ばかりが浮きものか。わたしの心も浮いてきた。浮いて踊るは阿波おどり」

己を奮い立たせ、ほかの踊り子を盛り立て、俺はついに連と一体になった。唄と鳴り物のぞめきに血肉が躍動し、もう踊りを止めるわけにはいられない。ここには半纏を着た男もいなければ、浴衣に網傘を被った女もない。どこかで鉦の音はするものの、三味線や笛の音が聞こえるわけではない。鳴り物と言え、路上で小銭を稼いでいた音楽家か、レンタサイクルのベルか、スマホの電子音か。これは偶発的にはじまった輪踊りなのか。まさか、

そもそもここは横浜じゃん。

天空の渦潮は、地上の輪踊りとシンクロするようにますます勢いを増していく。やがて、改修工事のために全館一時休館となっているマリインタワーまでもがゆっくりとせり上がっていった。不意にスマートフォンが震えた。右手と左手を入れ替えるタイミングで瞬時にジーンズのポケットからそれを取り出す。画面には買い物で散々俺たちを待たせてくれた妻の名前。そして、メッセージが流れた。

ビルと一緒に飛んでるんだけど！

俺は妙に落ちていた。この渦潮が入り口であること、その先には出口となる渦潮が存在すること、俺はあれがワームホールであることにうっすら気づいていた。今すぐ妻のもとへ飛んで行くことはできた。踊りを止めればいいのだから。それでも俺は踊りを止めない。あいつを残して行くわけにいかない。それ以上に点と点を結ぶワームホールの喉を塞いでしまっはいけない。巨大な重力に対抗するには相応の遠心力が必要だという。無事に妻を徳島へ届けるため、輪踊りを止めてはいけない。無事に辿り着きさえすれば、阿波踊り空港から飛んで帰ってこられるだろう。

「あ」

こんな時に限って、出張先で食べた徳島ラーメンのことを思い出した。豚バラ肉と少し甘めのスープ。どんぶりの中央には鮮やかな生卵。口の中に唾液が溢れる。踊りを止めて俺も飛んでいこうかしら。大きく首を振る。

「猪が豆食うてホーイホイホイ」

邪念を振り払うように声を上げ、渦の向こうに消える妻の無事を祈りながら踊り続けた。ついにはマリインタワーも飛んだ。全長一〇六メートルのタワーは、渦潮に立ち向かうかのようにその中心へと進んでいった。大きく水しぶきをあげながらゆっくりと突き刺さされば、渦は急激に勢いをなくしていく。

俺たちはさらに声を上げて踊りをシンクロさせていった。
「一かけ二かけ三かけて、し（四）かけた踊りは止められぬ。五かけ六かけ七かけて、や（八）っぱり踊りは止められぬ」

ア ヤットサー ア ヤットヤット

踊り子たちが生み出すエネルギーが渦潮に遠心力を加え、閉じかけたワームホールの喉が再び開いていく。

アーラ ヨイショコラ ヨイショコラ イケソラ イケソラ

渦潮はゆっくりとマリインタワーを飲み下していく。

アーエライヤッチャ エライヤッチャ ヨイヨイヨイ

踊りのヴォルテージュは最高潮に達した。ぞめきの旋律に誰もが酔いしれ、熱狂のるつぽに引き込まれる。俺は何もかもが渦潮に飲み込まれていく様子に見惚れ、ドーパミンニューロンが暴れ出した。全能感に支配され、笑いがこみ上げてきた。そして、ついにはマリインタワーは飲み込まれ、彼の地へと送り出されていった。

やがて、唄が止む。全ての鳴り物が止む。最後に渦の彼方からゆっくりと鉦が三回響いた。誰もが踊りを止めると、天の渦潮は勢いを無くし、大きな雨となって崩れ落ちた。空は青く晴れ渡り、大きな虹がかかる。見渡す限りに広がった剥き出しの大地。その上には、なにもかもをやり遂げた者たちが見せる顔と顔と顔。俺は息を切らせ、肩を揺らしながら込み上げる不安の理由を考える。そして、耳にまとわりつく鉦の残響をたどりながら雲一つ無い青空を見上げた。

途端、大栈橋の方から汽笛が鳴り響いた。踊り子たちは目を見開き笑顔を見合わせる。提灯や団扇を空高く放り投げ、地鳴りのような歓声をあげた。

「フェリー『びざん』だ。すごい。時間通りだよ。ママたちが帰ってきた」

あいつは親指を立て、そいつを俺に向けた。

「フェリーい？ ママたちって、随分早くないか？」

踊り子たちは大栈橋へと駆け出す。

「空間を結ぶワームホールの入口と出口に旋回の差をつけることで時間差が生まれたんだ」

「なんだって？」

俺はあいつの声を追いかける。

「ママは徳島に放り出されたと同時にちょっとだけ過去へ飛ばされたんだよ」

俺は混乱する頭で、あいつ等を追いかけることに精一杯。そして、つるんとしていた頃の妻を思い浮かべていた。海を右手に山下公園を駆けながら、メールを返信しなかったことを後悔。怒っているだろうな。他愛ないことに怯えながら速度を落とす。そして、立ち止まってしまったのは、フェリーが想像を超える立派なものであったから。

課題「徳島」

クニモサレズ

地方再生AE機構による全く新しい生活スタイル『クニモサレズ』のご提案。

「三〇年安心の老後生活が、たった一〇〇〇万円で送れます」

三社渡り歩いてゴールイン。退職金をあわせてどうにかかき集めた一〇〇〇万円。私は夢の街に乱立された格安の分譲核シェルターを購入した。仲介手数料なし、保証人なし、三〇年分の合成培地および光熱費込み。健康診断と数日の技術指導を受ければ、もう放射線に怯える必要はなく、汚染動物の畜肉や遺伝子操作で肥大化した野菜を食う生活ともおさらばできる。

「あなたの細胞に最適なテラーメイド培地で、自家細胞食肉を培養しませんか？」

私は、遺伝子情報から調合された最適な化合物と分化誘導因子のミクスチャーをぬるま湯で溶かす。続いて、自ら抜き取った血液に凝固剤を加え、得られた血清を添加。十分に混和してできあがった血清入り培地を二枚の培養皿に分注していった。

鼻歌混じりで鏡の前に立つそして、大きく口を開いて綿棒を突っ込んで、頬の内側から細胞を掻き取る。培地を小分けにした培養皿に次々細胞を投入してフタを被せたなら、来週の日付、そして、朝・昼・晩と記入していった。

「よし、来週分完成」

三枚ずつ重ねて、CO₂インキュベーターへ並べていく。一仕事終えたところで、先週培養した一枚の培養皿を手にとった。頬から掻きとった細胞は霜降りの脂肪が入ったステーキ肉へと分化している。思わず唾液が溢れてきた。煮るなり焼くなり食べ方は気分次第。培地にはたっぷり抗生剤が入っているから、薄くスライスして刺身で食うもよし。

はじめての試食会では多少の抵抗があった。恐る恐る自分の肉を口へ運んだものだ。

「ナツオさん、培養肉は初めてですか？ 私は軽く炙ったほうが好きですね」

髪を綺麗に束ねて白衣を纏った先生は、顔をしかめて試食する私に柔和な笑みを浮かべた。微笑みのスパイスも効いたのか、思いの外、自分の培養肉は不味くなかった。先生の言うように軽く炙ってみれば香ばしさが増し、不味くないどころか、むしろ美味しいと思えたほどだ。

「自家細胞だから安心でしょう？」

移植しようというわけではないのだから自家も他家もないだろう。それでも、人肉を食べているのだと考えると、自家のほうが抵抗感は格段に下がる。

私がまだ真っ黒になりながら公園で駆け回っていた頃、有機農業なんて言葉がもてはやされていた。その反面、無農薬をウリに化学肥料オンリーの水耕栽培も盛んになりはじめた。土耕の有機栽培か、水耕の無農薬栽培か。農業後継者不足に加えて、熱中症で倒れる者が国内だけで四桁を越える異常事態になると、急激に土耕は廃れ、野菜も肉も工場生産されることが主流となった。

野菜の苗は、成長点に分化全能性があるから、培養へ持って行くことは容易い。もう一方、食肉の生産が畜産から培養へと移行していったことには別の背景があった。国策による細胞治療・再生医療への投資だ。より大量に、より高純度に、細胞培養技術は目まぐるしく日々発展を遂げた。それに伴って、食用としても十分にペイが出来るようになるほど培養コストも下がっていったのだ。設備の初期投資さえできれば、長年掛けて家畜を育てるよりも細胞レベルで増やしてしまうほうが遙かに安上がりで労力も少ない。自動化がしやすい分、人手不足の解消にもつながった。

そして、畜肉培養は次の段階へ、自家細胞を食用とするのはどうかという考えが沸き起こる。自らを削って、増やして、食う。究極の地産地消とも言えるこの方法は、動物愛護やヴィーガニズムを訴える人々の間でも支持が広まっていった。

我が家は核シェルターと言うより、食肉培養に適したヘパフィルター付き無菌シェルターと言った方がいいかもしれない。ここに暮らすようになって何年経ったろうか。時折、一カ所だけ設けられた小窓から外の様子を窺っている。

放射能が除染される目途の立たないこの土地に、真っ白な核シェルターが並びはじめた頃、『クニモサレズ明るい未来の街づくり』と標語が掲げられた。国を挙げての一大キャンペーンだ。

「もう誰も暮らすことが出来ないとされたこの土地に、全く新しい生活スタイルが誕生することを誰が予想できたでしょう。宇宙時代の到来を考えるならば、放射線すら克服できないようでは明るい未来はありません。いずれ宇宙空間で人々が生活するようになることもSF世界の話ではなくなるでしょう」

現地から遠く離れた都庁前で、パブリックビューイングに映し出された夢の街を眺めながら、華やかなテープカット式典が執り行われた。

しかし、三年も経てばすっかりメディアから遠ざかり、夢の街は鳴りをひそめた。なにせ一度シェルターに入った者は基本的に外出することなどないのだから、商店や役所があるでもなし、近所付き合いがあるでもなし、街としての機能など何も有していない。墓場のほうが、参拝者が来るだけまだ賑やかだろう。辺りには無造作に廃棄された培養皿と注射器の山。時折、地鳴りがして、驚いて飛び起きれば、バイオハザードマークをつけたロードローラーが廃棄物を砕いていった。

私はベッドの上から手を伸ばしてVRゴーグルを掴む。

「最近、随分と周辺環境が劣化しているようだね」

問題があったなら、いつだって先生を呼び出すことができた。

「大丈夫ですよ。生分解性のプラスチックですから自然と土に帰ります」

「微生物は放射線に耐えられるのかね？」

先生は少しだけ時間を掛けて、膨大な情報から最適な回答を導き出す。

「現在、放射性耐性菌の遺伝子解析や分解菌のゲノム編集が進められています」

つまり、現状では廃棄物の分解は進んでいないということではないのか。

性別、肌の色、性格まで、VRゴーグルで呼び出す先生は自由に選択ができた。

「先生、お名前は？」

「ハルコ」

名前だけは、特徴の組み合わせによって自動で決まる。名前が呼べるだけでどこか気持ち安まるものだ。

「ハルコ先生、最近、血を抜くのがしんどくてかなわんです。針の跡が痒くて、痒くて」

「こちらから血清を送りましょうか？」

「それって、どうせ高いんでしょう」

「ナツオさんの余生なら一〇〇万円もしませんよ」

余生か。

三〇年安心の老後生活。それは三〇年の人生を保障するものではない。三〇年後、確実に死を迎えるというものだ。合成培地に加えられた僅かな遺伝子組み替えウィルス粒子、それは小腸粘膜で潜伏し、三〇年の蓄積によって突然発症する。

「残りの生存日数を確認して見積もり送っておきますね。他に必要なものはありますか？」

「誰が届けにくるのかな？」

「毎月プラボトルでポストに届きます。四℃保存でよろしくお願ひします」

所詮、仮想空間の先生だ。

シェルターの外で奇声が聞こえ、私は驚いてゴーグルを外す。小窓から顔を出せば、一人の男が頭を掻きながら大声をあげていた。まただ。こんな高線量地帯に生身の生き物など生きてはいられない。男はすぐに声を枯らして奇妙に崩れた。やがて、無人のロードローラーに砕かれ、何年も掛けながら土に戻るのだろう。我が家の窓枠に納まらないでほしかった。

深く考えてはいけない。定年まで働いて何とか一〇〇〇万円をかき集めた私は勝ち組なのだ。あと何年かの余生を、甘い肉とVR先生との触れ合いを生き甲斐にして過ごせばいいだけのこと。シェルターはそのまま棺桶となり、やがて地中深くに沈んでいく。あまり考えさえしなければ、こんなに気楽な余生はないだろう。

いつしか誰にも迷惑をかけずに死んでいくことが、何よりの理想と思えるようになっていた。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞞ラズ

イツモシヅカニワラツテイル

一日三枚ノ自家細胞培養肉ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ

VRゴーグルから着信音が鳴る。再び装着すれば目の前に現れる見積書。

「仕事ははやいね」

確かに税抜きでは一〇〇万円を切るが、二〇パーセントの消費税はかなり痛い。
とは言え、少しでも苦のない余生を求める以外に金の使い道があるわけでもない。

ミンナニテクノポートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

私は人差し指を動かして、電子決済による支払いを済ませた。

「早速、ありがとうございます」

「ハルコ先生、培養肉は好きですか？」

「私は軽く炙ったほうが好きですね」

嘘言わないでよ。あんた、なんにも食わないでしょう。無駄に会話などすべきではないのだ。ゴーグルの通話を切る前にあらためて見積もりを見返せば、まだまだ余生は残されていた。

可愛いを見守る

ミツは柔らかなお尻をペタンと畳に潰したまま、木製の汽車を滑り台に滑らせていた。
僕はその隣で遊びを見守る。

「ポッポー」

口で汽笛を鳴らせば、満面の笑みが小さな手を打った。

パパはダイニングテーブルで新聞を開いたまま、すっかり顔を隠している。ここから見ると足を生やした新聞星人みたいだ。

「プープーじゃなくて、ポッポーだろ」

新聞星人は呟いた。僕は首を傾げる。

「ミツがブーブーって言ってるの？」

新聞星人はひょっこり正体を覗かせた。

「さっきからずっとブーブーブーブー言ってるぞ」

「そうなんだ」

飽きることなく繰り返される遊びを眺めながら肩を落とす。僕の声は届いているのだろうか。ミツはふと黙り込み、汽車を畳に置いた。すると、重たいお尻と頭をフラフラさせながら懸命にバランスをとって立ち上がり、少し前屈みになってキッチンへとペタペタ歩き出した。

「ママ、ミツがそっちに言ったよ」

鼻歌混じりに食器を洗うママは振り返って僕と目をあわせる。ミツの背中を指させば、慌ててエプロンで手を拭いた。そして、床に膝をついて両腕を広げる。ミツはその胸に飛び込み、ママは柔らかい身体を捕まえて「ギュ」と呟いた。思わずこっちの身体がギュとなる。

「どうしたん？」

ママはほっぺたをミツの頭にのせたままパパのほうに目を向ける。新聞星人は何も答えない。

「ねえ、ミツなんか言ってない？」

「泣いてる、かな？」

「あら、言われてみれば震えているみたい」

僕が慌てて駆け寄ると、ママは小さな両肩を掴んで引き剥がす。僕は二人の隙間に首を突っ込んだ。

「ありゃ、泣いてるね」

僕はミツの涙を見て、パパはその声を聞き、ママは温度を感じた。

僕が首を引っこ抜けば、ママは再びミツを引き寄せて時計を見上げる。

「おっばいの時間かな」

男二匹をダイニングに残し、ママはミツを抱え上げて和室へと姿を隠した。

僕は冷蔵庫から取り出した冷えた麦茶をコップに注ぎ、新聞星人の向かいに腰掛けた。

「最近、ミツはブーブー以外になんか言うようになった？」

「実はな、」パパは声を潜めた。「この前、パパって言ったよ」

僕はコップに口をつけたまま鼻でふうんと頷く。

「ママには内緒な」

「なんで？」

「ママよりパパが先だったら、ママは嫌がるだろう」

そんなものか。僕はもう一度ふうん。

「ミツ、可愛いかな？」

「可愛いよ。僕にも声が聞こえたらいいのに」

「それを言ったら、パパには姿が見えない。ママなんか、見えも聞こえもしない」

「でも、抱っこができるよ」

「ミツにしてみたら、ママにはそれが一番大事なことなのだろう」

全てはミツが選んだことなのか。そうだとすれば、ミツにとって、僕には見えていることが一番大事だってことになる。コップの縁を噛んだまま新聞に隠れたパパをそっとつつく。パパはあんまり見ないもんね。

ふすまの向こうから優しい歌声が聞こえる。それ以外に音はない。パパは新聞の隅々までじっくり時間をかけて文字を追う。生活は貧しかった。ママの歌はミツに届いているのだろうか。ふすまの向こうにいるミツは誰の目にも映らない。僕が見ていないと消えてしまいはしないか。そして、僕のことは誰が気に留めてくれるの。ふと大きな不安に襲われると、新聞を叩き落として膨れた体にしがみついた。パパはなされるがまま、決して怒りはしなかった。ちょっとくらいならば怒ってくれてもよかったのだけれど。

「おまえ、本当に可愛かったんだよ」

私は窓枠に頬杖をつき、流れる景色を眺めながらボックスシートで揺られていた。親父が脳梗塞で倒れてから、実家に帰る機会も増えた。すると、約束をしていたわけでもないのに、特急からローカル電車に乗り継いだあたりで、偶然に兄弟が出会したりもするのだ。

「今は可愛くないみてえな言い方だな」

スマホに目を落とした弟の、少し薄くなった頭頂部を一瞥して鼻を鳴らす。

「可愛い、可愛い」

冗談めかして言うけれど、あながち冗談だとも言い切れない。目の前のおっさんを未だに可愛いと思っている兄貴がいるのだ。

「キモい、キモい」

勿論、声が聞こえなかった頃の方がウン十倍も可愛かったよ。嫌みの一つでも重ねてやろうかと思ったが、列車はトンネルに飛び込み、私たちは轟音に包まれた。蒸し立ての饅頭のようなミツの顔を思い返していたところ、途端、真っ暗な窓に皺の増えた自分の顔が映し出された。

大抵の場合、弟というものは兄貴の意志とは関係なく現れる。その上、貧乏暮らしのどん底だった。無計画な親父の失態。弟の誕生は決して手放しに歓迎できたものではなかった。それでも、おふくろは苦しみとともにミツを産み、親父は悶えるおふくろに目を背けたままミツの第一声を聞き入れた。私がはじめて認識した弟は保育器の中、純白のベッドに横たわる黒目がちな小さな命だった。どこか奇妙なバランスに首を傾げる。正直なところ、家に連れて帰る頃までは素直に可愛いと思える授かり物ではなかった。

生活を苦しめる存在が、私を端に追いやりに中心に居座る。父親は休日返上で働くようになり、おふくろはミツと片時も離れられない。私は随分つまらない思いをした。情けないことに、三人もいながら、たった一つの小さな命を受け入れることに手一杯だった。

「ミツ、可愛いかな？」

親父はどこか申し訳なさそうに何度も尋ねた。私はどんなにつまらない思いをしても、それを肯定することが両親のためになるものと考えた。

「可愛いよ。僕にも声が聞こえたらいいのに」

はじめて声が聞こえた時のこのことはよく覚えている。やはり畳の部屋でミツの遊びを見守っていたときのことだった。私はいつもより少し前のめりになって、強く意識し

ながら耳を傾けていた。

「ポッポー」

傾聴が功を奏したのか、ミツがようやく聞かせてくれる気になったのか。その小さな声がどれだけ嬉しかったことか。

ミツに声を掛けながらの遊びを見守っていたのに、いつまでも汽車のことを「ブーブー」と言うのは、私が兄貴として未熟だから。そうに違いないと思っていたのだ。

そもそもミツは私の存在を了解していなかったのではないか。はたまた見えるだけの弟は私の前に存在していたのか。親父がその声を聞きとろうとも、おふくろが温もりを感じようとも、私にはいつも無声映画を覗いているようだった。見えてさえすればそれは存在していると言えるのだろうか。弟が生まれたなんて思いこんでいるだけではないのか。存在とは私の一方的な了解だけで決定されていいものか。言葉を駆使することができない当時の私は、自分の思いすら整理することができない。そして、不安ばかりが膨れ上がる。一人で抱えきれなくなれば、新聞星人を追い払い、親父にしがみついた。

その日、ミツは変わらぬ笑顔で「ポッポー」と言った。私は驚きのあまり、気の利いた言葉が思い浮かばず「ポッポー」とオウム返し。その日は、柔らかいお尻を追いかけながら畳の上をぐるぐると回り、喃語のキャッチボールを繰り返した。ここに新たな遊びを発見。二人の声が往復しだした時、自分がミツの兄貴として存在する世界を強く認識した。

トンネルを抜けるとそこはど田舎だった。辺り一面に田畑が広がり、肩車された小僧が私たちを運ぶ列車に大きく手を振っていた。オレは小さく振り返す。もう一方の手には機関車トーマスが握られていた。

「ミツは汽車のことをずっとブーブー言ってたな」

「それ、おふくろから何度も聞いたよ」

「親父でなく？」

返答はない。ミツはスマホを連打して、モンスターをゲットした。実際のところ、俺だってミツの「ブーブー」を記憶しているわけではない。はじめて聞いた言葉は「ポッポー」だったから。親父やおふくろから聞いた話によって、俺の中に「ポッポー」以前の幼いミツの言葉や温度が刻まれている。

俺は俯いたままの弟の頭を指で突いた。

「なんだよ」

「結構禿げてきたな」

「うるせえ」

禿げて可愛くもない弟がここにいる。いい歳してまだゲームかよ。二〇〇〇グラムにも満たない身体で生まれてきたから、ずっとチビだし、禿げるのも早かった。それでも親父やおふくろはミツの帰りを待ち望んでいる。おふくろなんてまだまだ食べさせなければいけないと勘違いして、大量の飯を用意しているのだ。チビで禿のおっさんを太らせてどうする。

「親父、ポケモンはじめたらしい」

「なにそれ？」

「リハビリにいいだろうって、俺がテキトーなこと言ったら、はまったみたい」

「いい歳してゲームかよ」

兄貴にはいつでも兄貴ぶる用意がある。列車が減速をはじめた。弟は弟らしく黒目がちな顔を上げる。そして、ミツを見て微笑む両親の顔を思い浮かべ、私はどこか誇らしく思うのだ。

正義の煮方

過去最低の投票率でも民主的に選ばれた私だから何をしてもいいのです。政策に期待されず、人柄すら信頼されなくても、他の勢力よりは多少良さそうだし、中身はどうあれ実行力には一定の評価があるのです。あんたらも批判ばかりしていないで対案を出しなさいよ。腹が立つから息巻いてみせるけれど、そんなものは数の力で潰してあげる。

おやつはタピオカミルクティ。笑顔を添えてSNSにアップ。いいねが四桁超えれば気分も上々。ご批判に対する返信はいたしません。そもそも見ていません。先ほど言ったでしょう。対案なんて意味がありません。私たちが選ばれたパーティーなのです。もはや何をしたらって選ばれてしまいます。

年号を発表しただけで若い娘にはカワイイなどと評価を受けるのだから、長々同じことを続けていると何が起こるか分からないものです。かと言って、ダラダラ過ごしてきたわけではないですよ。凡人には到底理解ができないような努力をしているのです。

巨大な組織をいかに取り込むか。あのベリー・アンボンタン・パーソンは、どうしたら気持ち良くこっちに振り向いてくれるでしょう。仮想敵国の批判かしら。戦闘機の爆買いかしら。カジノを含む娯楽施設の誘致かしら。どれが一番お好みですか。何が一番儲かりますか。最近、アマゾンが燃えましたね。仮想市場ではなく熱帯雨林のほうです。あれにはひどく心が痛みました。え？ 意外ですか？ ここだけの話、私ね、本当はデカプリオになりたいのですよ。レオナルド・ウィルヘルム・ディカプリオ。いや、あんな人に、皆さん、私たちは負けるわけにはいかない。女子高生にカワイイなんて言われくらいで満足するわけないでしょう。骨盤の固まった大人ですから。生産性を上げて消費を繰り返す。それにすら満足ができなくなりました。結局、ヒトは合理的な活動だけでは埋まらないのです。時に批判は折り込み済みでおやつの公開なんて遊びに興じる。太陽を見上げれば、無目的な浪費生活に虚しさを覚えます。全身を取り巻く体脂肪が悍ましい。目眩を覚えて瞳を閉じれば、いつだって勇壮な祭囃子が鳴り響く。

だからね、どうしても手に入れたいものがあるの。緊急事態条項。またの名を国家緊急権。民主的なワイマール憲法からナチスを生んだ条文です。あれって最強でしょう。そいつを手にしたならば、ベリー・アンボンタン・パーソンなんてもちろんのこと、レ

オ様だって、私には敵わないでしょう。あんな人より先にやりたいんですよ。二酸化炭素削減。分かっちゃいながら延々石油を燃やし続けた私たちが、今さら大きな顔をして、楽しく、クールに、セクシーに世界をリードする。

個人はあれほど優れているのに、玄関の敷居をまたげば、誰もが時計仕掛けのシステムに組み込まれる。生産性向上こそが存在理由と盲目的に走り続ける。それでもたまたまガスを抜く。時には汗を流して遊ぶ。地球をすり減らす愚かな循環を断ち切るためには、ドガドカうるさく遊べばいい。非生産、非日常の興奮を出現させるためヒトに祭りは欠かせない。リオ、ベネチア、ニース、阿波のカーニバル。山車に、炎に、トマトに、オレンジによる調和と混沌。日本には一〇万とも三〇万とも呼ばれる祭りが存在する。私は国家緊急権を発動し、この島国から全国の祭りを同時多発させる。地球全土へ飛散した祭り囃子は、世界の祭りを次々と着火させ、生産プロセスを混乱に追い込む。世界は未曾有の祭りに吞まれ、狂乱のヴォルティエーチェ。トマトがちょっと足りないかしら。破壊を伴わない祭りは、大した需要を生み出さない。

You may say that I'm a dreamer

But I'm not the only one

台風や熱中症に備えるのは大切。でも、その前に根本解決が必要でしょう。ご承知の通り、地球は随分と疲弊した。そして、あらためて問いたい。本当に必要とされるのは、憲法改正を議論するパーティーか、審議を全くしないパーティーか。日本三大祭りとはなにか。論争に終止符を打ち、憲法に明記します。文化祭や体育祭に関わる教育費用は完全無償化。

I hope someday you'll join us

大本命は緊急事態条項だけれど。

And the world will be as one

ね。

No-No Boy No-No Girl

クルマ離れ、タバコ離れ、酒離れ、若者はまったくハングリー精神が無い。

餓えの時代を知らないからだ旧世代は言う。金がないからだ若者は反論する。

二〇世紀末、恐怖の大王は降ってこなかった。青春と呼ぶべき時代に餓えた記憶はないが、華やかに散財をした覚えも記憶もない。酒は呑んだが、タバコはやらない。免許は取ったが、クルマを持つことはなかった。あの頃の旧世代は、若者にどんな文句をつけていたろうか。何かしらのいちゃもんはつけられていた気がするが、差ほど気にはし

ていなかった。

「戦争でこの島を取り返すのは賛成ですか、反対ですか」

狂った若者もいる。戦後七〇年以上も過ぎ、退屈やマンネリを打破する聖なるものが欲しくてたまらない。誰かが善としたハングリー精神かしらん。これを勝ち組と呼ぶのかしらん。

資本主義社会を加速させるエンジンとして、国家が戦争へのアクセルをベタ踏みする事は、経済を回す上で効率がよい。格差社会の中でも、決してマイカーが珍しいものではない。壊さなければ需要は産まれない。効率よく壊すツールこそが何より経済を回す起爆剤。ニトログリセリンよりは核兵器。格差社会の勝ち組は自分のニーズが分からない。金さえあればなんとでもなる。目の前に揃えられた有り余る便利にうんざりしている。たくさんぶっ壊して本物の需要を見せてくれ。

狂った社会に一石を投じる若者が現れた。彼女の名前は「明るく素晴らしい未来を楽しみにしているとても幸せな少女」またの名を「優しいが情報に乏しいティーンエージャー」。旧世代の身勝手な行動により事象の地平線が見え始めている。愛されるべき子供たちは破滅に追い込まれていく。

「人々のあきらめ、じゃないですかね」

怖い物は何かと問われ、二〇秒ほど考えてから、聡明なプロフェッショナルは答えた。あんたに期待はしていない。どうでもいい。どんな場所に立つニンゲンであれ、そうやってしまったら、その立場を誇示する意味はない。

将来を傍観せず、システムに巻き込まれず、戦争の魅力に抗いつづける。あと一〇年。なにもしないで地平線の向こうに消えてなくなるか。

靴は履き物

数年ぶりに正確な時を刻むようになった書斎の壁掛け電波時計。どうにも信用ができなくて、見上げる度にスマホや腕時計で再確認をしている。もはや時計の意味をなしていないが、大切な人から転居祝いにもらったものなのだ。

前触れもなく狂いはじめたが、何もせず直ったわけではない。時計背面にある二つのボタンの使い方を知らなかっただけのこと。きっと取扱説明書は付いていたのだろうが、捨てたかどうかも記憶にない。壁掛け時計の説明書なんて誰も読まないだろう。

メーカーのサービスセンターにメールをしてみれば、翌日には返信があった。はじめに電池をはずして一方のボタンを三回プッシュ。再び電池を入れたならもう一方を長押ししてみよとのこと。なんだそのおまじないのよう操作は。訝しみつつ実施すれば針が回

りだし見事に復活。専門家の言葉には耳を傾けるものだ。いままで狂ったオブジェを眺めていた日々は何だったのか。それでも、この時計が信用を取り戻すまでにはまだまだ時間がかかる。その前に、また狂いはじめるかも知れない。

「反省しているんです。ただ、これは私の問題だと思うが、反省をしていると言いながら、反省をしている色が見えない、という指摘は、私自身の問題だと反省をしている」

よく舌を噛まずに言えたものだ。なにを反省していたときの発言であったか。今となってはすっかり忘れている。二酸化炭素。石炭火力。環境相の発言だからその辺りの発言だったのだろう。待ったなしの地球温暖化にコロナ騒ぎが上書きされ、活動は自粛、多くの大切なことに目が背けられている。

カミュの『ペスト』は売り上げを伸ばしているという。大きなパニックの中でニンゲンはどのような行動をとるのか。そして、個人を重んじるニンゲンと社会を重んじるニンゲンの間には対立が生まれる。実は戦争を描いたものだとも言われる。我が国は忍耐を善として、何事にも大騒ぎすることを望まないニンゲンが多い。台風はいずれ過ぎ去る。戦争も。疫病も。起こってしまったパニックはなかなか認めない。パニックの最中には平常心を呼びかける。少しでも収束へむかえば終了を宣言する。一度宣言したものは取り消さない。同じことを繰り返す。

俺は頭にエイトホールブーツを乗せて、顎の下で靴ひもを結んでみる。ドクターマーチンのチェリーレッド。いい歳して、未だにこんな履き物が好きだ。そう。俺はこのエイトホールブーツが靴であり履き物であることを完璧に理解している。俺はこんな形で裸足のまま玄関のドアを開けることはできない。もし、靴が過不足なく靴か靴でないものへと分けることができない世界へ踏む込んだならば、世界の様相は一変するに違いない。

夫人は赤木職員の手記を公開、国と元財務省理財局長を相手取って大阪地方裁判所に民事訴訟を起こした。大きな勇気と聡明さを持って行動を起こす。政権をひっくり返そうというのではない。何故愛する夫は自殺をしなければならなかったのか。その真相を知りたいという点において。

赤木夫人には敬意しかない。手記には多くの新事実が書かれていた。
「新たな事実が判明したことはない。再調査を行うという考えはない」

財務相は平然と嘘をつき、一〇〇〇回繰り返せば真実になるという。
「真面目に職務に精励していた方が自ら命を絶たれた。大変痛ましい出来事であり、本当に胸が痛みます。改めてご冥福をお祈りしたいと思います」

首相は何に胸を痛めているのか知れない。

俺はブーツを頭の上に乗せたまま、世界よ生まれ変われと祈ることしかできない。せめて裸足のまま駆け出して永田町へ向かおうか。首相官邸の敷地へ入ることも許されず、警備員に止められる。

「何をしていますのですか？」

「靴は履き物ではありません」

俺は困惑顔の警備員に向かってそれを一〇〇〇回繰り返す。ずっと考える。思い続ける。忘れない。これ以上に効果的な世界の救い方はないものか。ずっと考える。思い続ける。忘れない。

実際は暗い部屋で一人。俺は拙い妄想を抱き、ブーツを頭に乘せたままキーボードを打ち続けている。

憲法記念日

「ウイルスの拡散防止に役立つならば、自分の人権をある程度犠牲にしてもかまわない」

小僧は俺に缶ビールを差し出した。

「どうした？ おまえ」

小僧とは言っても気づけば四〇過ぎのおっさんだ。白髪頭を気にしていた俺もいつしか旋毛が消滅していた。

「そもそもなんなんだその意見は？」

年金を崩して買ってやった六缶パックだが、一日で空けてしまいそうな勢いだ。派遣切りにあって腐っていた小僧に現金を渡す気にはなれなかった。俺も男だ。仙台市の日和山のようなあいつのプライドでも、理解がないわけではない。

先日の報道番組は、スポンサーを無くしたオリンピック選手がウーバーイーツのバイトをはじめたと伝えた。

「マイナースポーツはしんどいよな」

「だいたいスポーツ選手の根性論は気に入らん」

小僧はそう漏らしながらも、スマホではウーバーイーツを検索していた。しかし、うちには母さんが残した三輪自転車しかない。あいつがいなくなって土埃と蜘蛛の巣にまみれたままだ。

俺たちは缶をぶつけて鈍い音を鳴らすと、お互いの喉仏を誇るように揺らした。

「そう思うの割合って何パーセントだと思う？」

「そう思うの割合？」

「ウイルスの拡散防止に役立つならば、自分の人権をある程度犠牲にしてもかまわない」

「ああ」

俺は自民党の支持率くらいだろうと、最近の世論調査を思い返す。

「そう思う人の割合は、三〇か国の平均では七五％、この国では三二％」

もうちょっと俺の答えを待てよ。割といい線だったんじゃないのか？

「三〇か国中で何位だと思う？」

また問題が飛んできた。

「割と低ってことだよな」

「仙台市の日和山だよ」

以前、小僧と一緒に調べた日本で一番低い山だ。ネットを叩いただけだが。

「最低か」

小僧は三岳目を一気に叩いて、首を振った。目は据わっている。

「サイコーだよ。この国の人権意識は世界サイコーレベルなんだよ。国家緊急事態条項なんて糞食らえさ。金を刷る人間が足りないなら、俺がプリントゴッコしてやるよ」

俺は苦笑いを浮かべ、最近SNSで見た興味深いつぶやきを思い返していた。

日常が戻ってくることをおそれている人もいると思う。

@yoshimuramanman 2020年04月24日 23:39

おそれている人も、都合がわるいと考える人も、幾らだっているのだろう。これを改憲の好機ととらえる輩も一つ。耐え難きを耐え多くの犠牲を払っても塞翁が馬。いつしか我々は美しさと絆を重んじる国民性とやらで乗り越えてしまうのだろう。結局、政府は政権維持程度の活動しかしなかった。無能・無策ではない。それがあいつ等のやり方だった。

「あの時、緊急事態条項があればいくらかでも対応ができたのだ」

そんなことを声高に言いたいがため。

ふいにスマホが騒ぎはじめた。小僧はそいつを握ると閉じかけていた目を爛々と光らせた。

「はい。お電話ありがとうございます」

垂直に立ち上がり頭を下げる。俺ははじめて見る小僧の外面に呆然とした。はいはいのはいと応えるとあいつはスマホを切って尻ポケットに差し込んだ。そして、隣の部屋から見慣れない大きなリュックサックを引っ張り出す。

「仕事だ」

ウーバーイーツ？

「おまえ、自転車は？」

「ママのバギーがあるだろう」

踏み出した足が明後日へ向かう。

「大丈夫か？」

かつては缶ビール片手に小僧を乗せて自転車を漕いでいた。文句を言えた義理ではない。でかいバックを背負いながらフラフラ外へ向かうあいつが頼もしくも思える。それでも、一つだけ言わせてくれ。

「マスクして行けよ」

日本リサーチセンター

<https://www.nrc.co.jp/report/200409.html>

ボートを漕ぐ

俺はいったい何歳になったのだろうか。四〇は越えた。不惑と笑って何年か経つ。一〇年は経っていないはずだが、あれから何年経ったのかははっきりしない。身体は明らかに衰えている。酒を呑んだに夜は確実に後悔する。ぼんやりとSんSのタイムラインを眺めながら、声を張り上げる若者に目頭を熱くする。都知事を目指す爺さんにだって目頭が熱くなる。俺も何か紡ぎ出すことができないかしら。自分の目頭に訴える言葉が降りてこないかしら。デスクについてキーボードを叩く。アルコールに浮かぶ脳味噌がタプンタプンと音を立てる。時折、腹に巻き付いた無駄な肉に指を這わせて、違和感のとれない肩を回して、俺をどこかへ運んでくれる言葉に出会うまで、ひたすら退屈と違和感の沼を漕いで進む。熱帯夜。そう、この熱帯夜も少し問題よね。窓を開けても停滞する夜。年々蒸していく空気。冬がとても好きだったの。燐とした空気。白い息。真っ赤なロングコート。むかしはね。でもね、今となっては夏はさほど嫌いじゃない。むしろ冬のほうがしんどいと思うようになった四〇代。二一時四八分。あと一時間もすれば寢床の準備をはじめて明日に備える。明日はもう金曜日だけれど、朝からやるのが残されているから。仕事があるだけありがたいと思わなければならない。飯が食えるだけありがたいと思わなければならない。酒が飲めるだけありがたいと思わなければならない。嫁がいるだけありがたいと思わなければならない。かわいい子供がいるだけありがたいと思わなければならない。それでも人生には不愉快がまわりつく。そいつをアルコール漬けにして滅する。アルコールに浮かぶ脳味噌に乗り込んで暗く重たい夜を漕ぎ進む。思うようには進まない。何処か愉快なほうへと向かいたいのに、思うようには進まない。手漕ぎのボートは何かを期待させる。そいつに乗り込むと何か愉快的なことが起こる気がするのだけれど。いざ乗り込むと大抵不安しかない。思うようには進まない。下手に動けば転覆するのではないかしら。右手をそっちに回したら左回りのはずよね。それでもボートは右へ回り始める。対面に座る君の視線が優しく痛い。残された時間はあと僅か。もとの岸边にたどり着けるのかしら。二〇年も昔のことを思い返してる。あの時、俺たちは岸边にたどり着いたんだよ。そして、今へ続く。君には随分と頼りない姿を見せてしまったけれど、いつしか同じ屋根の下。隣のリビングルームでタブレットをスワイプさせながらチークの色を吟味している。拡大するヤツ。スワイプではないね。俺は「スワイプ・拡大」と検索をかけて、ピンチアウトという言葉を得る。親指と人差し指でグアッとするやつ。子供はいつの間にか一人部屋で寝息をたてるようになった。俺は恵まれている。俺は恵まれている。仕事があるだけありがたいと思わなければならない。飯が食えるだけありがたいと思わなければならない。酒が飲めるだけありがたいと思わなければならない。嫁がいるだけありがたいと思わなければならない。かわいい子供がいるだ

けありがたいと思わなければならない。それでも人生には不愉快がまわりつく。白髪を受け入れる。乾いた肌を受け入れる。老いに慣れる日はやって来るのだろうか。俺は日に日に重くなる水にボートを浮かべて漕ぎ続ける。

面倒くせえな

雨かよ。面倒くせえな。

どうせあのヒトブッチギリだって言うじゃない。俺が何したところで変わることは無いだろう。投票所、小学校だったっけ。俺の通っていた小学校ではないけれど、ふと懐かしい顔が浮かぶ。

そういえば、参院選の時には突然あいつから電話が掛かってきた。

「ビビンバ、ひさしぶりい」

三〇年も昔のあだ名だ。学芸会の主役を張っていたあいつ。役の名前は覚えているのに役者の名前は忘れた。スズキだったかイトウだったか魚みたいな名前だった記憶がある。

「ベロンチョに携帯番号聞いたんだよ」

未だつながっている数少ない幼友達だ。勘弁してくれ。押しの弱さは昔っから変わらない。

思い返してみれば、多分スズキだったあいつの家には禿げた政治家のポスターがいつも貼ってあった。教室の外で付き合いがあるほど仲良かったわけでもないから、あれがなんだったのか聞いたことはなかった。勝手にあいつの親父さんかと思っていたけれど、有権者になって思い返せば、なんだそういうことか。

今回は電話が掛かってこない。どうせ選挙に行かないだろうと見破られたか。そもそも今回スズキたちは誰かを応援しているんだっけか？ 実質的には現職を応援することになるとわけの分からないことを言っていたような。

既に掛かってきてたりして。スマホを手に取り着信履歴を確認する。最近の不在着信はフリーダイアルと実家だけだ。去年の参院選で電話が掛かってきた時、イトウだかスズキだかで登録した覚えがあったが、アドレス帳にも残っていない。画面をスワイプさせて行くと思わずベロンチョで親指が止まった。

押しの弱いあいつには連絡があったろうか。久しぶりに電話でもしてやろうなんて気になった。

「ベロンチョ、ひさしぶりい」

「お、ビビンバ、ご無沙汰。どうしたん？」

「いや、なんか、スマホ弄ってたら、ベロンチョの番号が目に付いてな」

少し間をおいてから彼女は答えた。

「なんか嬉しいね、そういうの」

その声は本当に喜んでいるようでもあった。

「スズキから電話あった？」

「スズキ？」

「イトウ、だったっけ？ あの主演だったヤツ。選挙になると電話してくる」

「ああ、イトウね。無いよ。そもそも私、都民じゃないし」

あ、そうか。

そもそもイトウだって今どこに住んでるのか知らない。

「イトウも大変だよね。頑張ってると思うよ。電話あった？」

「あいつ都民なの？」

「去年話したときはそう言ってた。何区だったっけな。ちょっとマイナーなところ。ビビンバも都民でしょ」

「市民だけだな」

「いいな」

俺は答えに窮する。

「ベロンチョだったら誰に入れる？」

想定していた「それは秘密」とは違い、聞いたこともない名前が即答された。

「誰それ？」

俺は正直に白状する。

「泡沫候補だって金持ちの道楽で三〇〇万円も払っているわけじゃないんだよ」

それから思いがけずベロンチョは力強く話し続けた。お下げ髪だった少女が俺の中で大きく成長を遂げていく。そして、最後に小さく舌を出した。

「そういえば、去年、勝手に番号教えちゃってゴメン」

「スズキ？」

「イトウ」

知らぬ間に握りつぶしていた投票所整理券から、慌てて手を離す。

「イトウはやっぱり現職なんだろうな」

「知らないけど。じゃなかったら、ちょっと格好いいね」

窓の外で雀が鳴いた。気づけば少し明るくなっている。俺は整理券のしわを伸ばして立ち上がる。

「さて、行ってくるかな」

「何処へ？」

何か冗談の一つでも言いたいところだったが、気の利いた言葉は浮かんでこなかった。

奥付

奥付

Puzzle 文集 10

<https://puboo.jp/book/115223>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/115223>

電子書籍プラットフォーム : パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト

Puzzle文集10

著 puzzle

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
